
トリコ チートを持った転生者

アルトアイゼン・リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリコ チートを持った転生者

【Nコード】

N7324V

【作者名】

アルトアイゼン・リーゼ

【あらすじ】

大学に通う青年

彼は家に帰る途中で死んでしまう
だが神に会い異世界に行く事になる
彼はどんな明日えお生きるのか？

異世界へ

俺は何処にでもいる大学1年生だ

一応県内トップクラスの大学に通っている

俺は考え事をしながら道を歩いていた

「うーんどうするかな、やっぱりパックをまとめて買おうかな？」

俺は遊戯王のパックの調律がほしくて買うか買わないか悩んでいる

「やっぱり調律がないとジャンクデッキが完成しないだよな」

俺はそんな事を考えて家に向かっていた
するといきなり携帯が鳴った

「もしもし？」

「あ、お兄ちゃん 今日早めに帰ってきてね 今日私特製のハンバーグだよ」

「そうかもう直ぐ着くから大丈夫だよ」

「じゃあ楽しみにしててよ」

ピッ

電話を切る

今の会話で分かると思うが今のは俺の妹だ

たつがみ ゆうな
龍神優奈

俺のたった一人の家族だ

俺の両親は俳優で海外に撮影に向かっている飛行機が事故を起こし
死んだ

その時、優奈はずっと泣き続けた

俺だって泣きたかったけど俺は泣いてしまったら
もう立ち直れない気がした
そうしたら優奈はどうなる？

だから俺はずっと優奈が自分で幸せを掴むまでそばに居ようと誓った

・・・失礼暗い話をしてしまった

生活は両親が十分生きていけるだけの財産を残してくれたので生活費には困っていない

まあ小遣い稼ぎにバイトはしているが

優奈は外人である母の血を強く引いており

金髪の髪に茶色の瞳、年は11歳

大人しくて少し茶目っ気のある小学5年生だ

容姿は・・・リリカルなのはのフェイトを想像してもらえばいいだろう

そして料理がとても美味しい

特にハンバーグは絶品だこうして話していると
少し早足になってきた

「ふふふ、楽しみだ優奈のハンバーグ できれば沢山食べたいな」

だが俺の願いは叶うことはなかった

青になった信号を確認し横断歩道を渡っていると

横からパトカーに追われた車が迫ってきた

そこで俺の意識はブラックアウトした

・・・俺は死んだのか？

「死んだとは言えませんか」

声がしたので目を開いてみるとそこにはカッコいい男性がいた

「貴方は？」

「私ですか？私は貴方達で言う所の神ですな」

「え！！？」

俺は目を限界まで見開いた

「そ、そこまで驚かなくても」

「無茶言わないでください！！！目の前で神がいたらびっくりしますって！！」

・・・失礼しました、取り乱してしまつて・・・」

「いえ御気になさらず」

「（神様がこんなに腰低くていいのかな？）

「これは私の性格です」

「！？声に出てました！？」

「いえ読心術が使えるだけです」

「そ、そうなんですか・・・すみませんが質問してもいいですか？」

「いいですよ」

「俺は・・・死んだんですか？」

「はい」

はつきりと神は言ってきた

その言葉が俺の心を抉る

優奈を一人にしてしまった・・・

俺は泣きそうになった

「でも貴方はもう一度人生をやり直す権利があります」

「え？」

「貴方は生前、妹さんの支えになるためいろんな事をしていましたね
その事は多大に評価できます、それに貴方は困っている人がいれば

救いの手を差し伸べてきた
それが理由です」

俺は神の言葉で希望が出てきた

「ほ、本当ですか!？」

「ええ」

「じゃ、じゃあ俺を生き返らせてください!!」

「・・・それは無理です」

「・・・え?・・・」

俺の希望が完全に撃ち砕かれた

「死んだ人間が同じ世界に行くのは無理なんです、すみませんでも
貴方の願いは叶えてあげます」

願いつて・・・俺の願いは生き返ることだって・・・願い・・・!?

「じゃ、じゃあまず妹の願いをかなえてあげてください!」

神は驚いたように聞いてきた

「妹さんの願いをですか？」

「はい、あいつは俺が幸せになるまで俺が守るつもりでした、でも
それはできない

だからせめて優奈には幸せになってほしいです」

「優しいですね、分かりました後貴方が行く世界はトリコですよ」

「え!?!でもあれって漫画じゃ・・・」

「あれはどちらかと言えばパラレルワールドですだから可能ですよ」

そうなのかも危険だよなあそこ・・・

「じゃあ身体能力はMAX俺の知ってるアニメ、漫画、ゲーム、小説の技、力が全て使えて

イメージしただけでその姿になれる変身能力

後どんな怪我や病気も心の病もどんな物でも治療、修復できる能力をください」

「うんわかった転生したら使えるようにしとくよ、じゃあ扉を開くよ」

「扉？」

神がそう言うと後ろにでっかい扉が現れた

「さあ行ってきて、原作ブレイクしていいから、妹さんの事は任せ
て！」

「お願いします」

俺は深く頭を下げ扉に入った

VSガララワニ

俺は神が開いた扉を抜けるとそこは森だった

風が気持ちいい

ここは何処だろう？

俺はとりあえず人を探して歩き始めた

・・・何処まで行っても木ばかり

当たり前か森だし

「でも軽く2時間は歩いてるのにぜんぜん疲れないな、あれかグル
メ細胞か？」

なんて思っていると沼に着いた

「ちょうどいい少し休憩するか」

俺は沼の近くに座った

「にしてこれからどうするかなあ、いくらチート持ってたって経験
がないからなあ・・・優奈元気にしてるか・・・」

妹が元気でやってるか心配だ

その時！

シャロロロ・・・バキ！ゴキ！モキヤ！ゴキヤ！

「へ？」

後ろを向くとガララワニが沼蛇を捕食していた

骨を噛み砕き肉を食いちぎりながらこちらに向かっていた

沼蛇ぬまへび

沼の泥中に身を潜めている巨大な水蛇

そのため、発見が非常に困難であり、沼蛇に攻撃の意思がある場合、高確率でフイ打ちを食らうことになる

沼の中に限ってはガララワニといえど、うかつに手を出せない。

生息地：沼の中

体長：20メートル

体重：9トン

価格：100g/7000円

沼のような濁った水域を好んで棲息する蛇の一種

警戒心が強く、あまり水上に出ないため、捕獲レベルも戦闘能力に比べ、割高に設定されている

蛇の一種だが、一部脂がのった部位は、ウナギの味に似ているため、蒲焼にすると旨いと評判である

捕獲レベル：5

分類：爬虫獣類

ガララワニ

真紅の鱗に覆われた巨大な多足ワニ

世界最高ランクのワニ肉として知られる

その捕獲レベルの高さから、通常的手段での食材調達は困難

非常に力が強く、76ミリの鉄筋を割り箸のようにへし折るほど夜行性なので、狩りは動きの鈍い昼間に行うのが定石

モモ肉など部位によっては小売でkg単価50万円は下らない

I G O がトリコに捕獲を依頼した際の報酬提示額は、kg 単価 20 万円（500 kg の個体で 1 億円）だったが、トリコは倍の kg 単価 40 万円を要求した
通常 150 年近く生き、加齢と共に食欲や獰猛さが強くなり、危険度が増す

通常は淡水の湿原に棲むが、海水にも適応可能。繁殖力が弱い反面、個体の寿命が延びてきているというデータもある

生息地：湿原・沼

体長：18メートル

体高：4.2メートル

体重：13トン

価格：部位によって違うが、モモ肉は 100g 5 万円

バロン諸島の生態系の頂点に君臨する巨大なワニ
繁殖能力は低いが、その分、生存力が強く、種の中には 300 年以上生存する個体もいる

一般的に鳥肉に近い味だと言われるワニ肉だが、長年生きて成熟したガララワニの肉は、最高級のブランド和牛のサーロインにも匹敵する脂のノリと旨みがあるという

今まではハンティングする以外に捕獲する方法はなかったが、近年 I G O がクローン生産に成功したため、近いうち大量生産も可能になるだろう

捕獲レベル：5

分類：爬虫獣類

「おいおいガララワニって此処バロン諸島かよ！」

「シュ〜カロロロガロオオ〜!!!」

ガララワニは尻尾で地面を叩きつけその反動で突進してきた

「うわ！」

なんとかダツシユで射線上から退避して避わす

「あぶねくさてどうするか・・・」

1 戦う 2 逃げる 3 やっぱ戦う・・・何だよっば戦うっ
て・・・

まあいいか力を試すいいチャンスだ、行くぜ！剃！」

六式の剃を使いガララワニの横っ腹に回り込む

「行くぜ！せえい！」

腹に超高速で連続でパンチを決めていく

「白虎咬！！おりゃあ！」

最後に手にエネルギーを収束させてそのまま腹に決めた

ガララワニは吹き飛んだが空中で態勢を立て直し着地した

「・・・白虎咬じゃあまだパワー不足かなら！」

俺の両腕にソウルゲインの腕をアーマーとして出現させる

「狙いは外さん！」

腕が高速回転を始める

「ロケット・ソウルパンチ！もとい玄武剛弾！」

ついアホセルで言ってしまった
アーマーのみを飛ばし顔を殴る

「ガロオオオ！！！！」

苦しんでるな

「止めだ！」

右腕だけ回転させ脳天を殴りつけた

「カロ・ロオオ・・・」

ドシン！！

「ふうガララワニお前の命頂きます」

俺は早速周りの木の枝を薪にしてガララワニを焼き始めた

「う〜んいい匂い！そういえば俺にグルメ細胞ってあるのかなあ？
ライブラ！」

う〜んライブラで探してるけど・・・あった！

やっぱグルメ細胞あるのか、トリコ並みに食べなきゃダメなのかな？

「お！焼けた〜！まずは食事だ！いったただきま〜す！あむっ」

クチュ、モグモグ、ゴクン

「うめ〜！舌に乗せるだけで肉汁が溢れ出てくる！そしてしつとりとしつつこの歯ごたえ！うま〜い！！やばい止まらない！やみつきになりそうだぜ！」

俺はそのままガララワニを食い続けて骨になるまで食い続けた

「ぶふい〜美味しかったな〜これなら一切れ10万相当する理由も分かるなさてグルメ界で修行でもするかな」

俺は翼を出してグルメ界の入り口、ザーベル島の命の滝壺に向かった

いざ！グルメ界へ！

俺はグルメ界の入り口のザーベル島の命の滝つぼに飛び込もうとしていた

「ここから落ちて死んだら洒落にならないな・・・確か次郎は此処が一番入りやすいって言うってたけど本当か怪しいな」

俺は覚悟を決める事をした

「よし！龍神 龍人行くぜ！」

俺は腹を括って滝つぼに飛び込んだ

凄いですピードで降りていくというか落ちていく
ビュウ~~~~！！！！

ん？地面？やべ！このままだとぶつかる！

「髪^{ヘア}ネット！！！」

地面すれすれで髪ネット^{ヘア}で勢いを殺し着地に成功した

「にしても体が重いな〜あれだけ降りたから重力が強いのかな？」

此処はアングラの森

命の滝壺の入界ルート入口にある森

人間界から見て、海拔がマイナス2万メートルの場所に存在する。

地上より地球の核に近い^{コア}ため、その影響で重力が強く作用している。
トリコですら歯が立たない凶暴な猛獣や、人間界の常識を超えた不

思議な植物も数多く存在する

すると後ろから何かが迫ってきた
デビル大蛇だ

「ギオ`ア`ア`オ`ギャア`ア`!!!」

デビル大蛇びいりおおへび

地獄から来た魔獣、と呼ばれる伝説の魔獣

太古の昔、最強と謳われたバトルウルフと肩を並べたと言われる
トリコの威嚇、ココの毒をも恐れず、爆音にも動じない

紫色の皮膚・髪の毛と、漆黒の牙・爪を持つ多足の大へび

体全体が伸縮自在なので、攻撃を予測しづらく、間合いをはかるこ
とも困難。また、皮膚を限界まで縮めることで、硬度と耐久力を上
げて身を守ることができる

鳴き声は「ロ`ロ`ロ`ロ`ロ`ロ`」

「ギオ`ア`ア`オ`ギャア`ア`」という凄まじい雄たけびには、
精神力の低い者の意識を混濁させる効果がありそう

口からは強力な消化液を吐き、足を切り落とされても瞬く間に再生
させてしまう

髪の毛からは毒液を分泌し、飛ばすことも可能だが、獲物の体に直
接、毒針のように打ち込むこともできる

全方向を見ることが可能な3つの眼と、顔中に点在するピット器官
により、暗闇の中でも獲物を見失うことはない

生息地：暗い洞窟の中

体長：35メートル〜40メートル

体高：-

体重：17トン

価格：100g / 15万円

地獄から来た魔獣と恐れられる大蛇
熱で獲物の位置を感知するピット器官や、獲物を仕留めるための飛
び道具の猛毒など

暗闇での闘いはかなり苦戦を強いられる

また、デビル大蛇自身がダメージを受けても瞬時に肉体が再生する
細胞、万能細胞で構成されているため、捕獲するには万能細胞ごと
破壊する強力なダメージを与えるか
高度なノッキングを行う必要がある

洞窟の砂浜にいたデビル大蛇は、捕獲レベル21だが、地球のどこ
かには、もっとレベルの高いデビル大蛇が生息しているというウワ
サもある

捕獲レベル：21

分類：爬虫獣類

「きつしよ〜!!」

サニーみたいな事を言ってしまう
だってマジでキモイだもん

「ロロロロロ!!」

「うるせ〜よ!!」

コイツの声はめっちゃくちゃ煩い耳が〜!!

「ギオッアッアッオッギャアッアッ!!!」

という凄まじい雄たけびを上げて突撃してきた

「クツ！剃！」

剃で避わしたがピット器官で俺の位置を把握したのか手を伸ばし足を掴んで投げ飛ばされた

「ぐっ！くっそ！青龍鱗！」

手にエネルギーをため青龍鱗を放ち腕を吹き飛ばすが瞬く間に再生されてしまった

「くそ！このままじゃあ・・・」

「ギョッアッアッオッ！！！」

こちらに向かってくるデビル大蛇

「こうなったら！リミット解除！おっりゃ！！！」

ジャンプをし青龍鱗を一気に連射する

煙でデビル大蛇が怯んだ隙に一気に距離を詰め

連続でパンチとキックを決め続ける

アップパーを決め大蛇を殴り上げる

「コード麒麟！！！」

すでに展開してあったソウルゲインの腕の肘ブレードにエネルギーを纏わせ大蛇に向かってジャンプする

「決める！おっりゃ！！！」

デビル大蛇を尾から一刀両断する

なんとかデビル大蛇をしとめることに成功した

「俺もまだまだな」

俺は此処で修行する事で高みを目指す事にした

美食屋

さて改めまして自己紹介だ

俺の名前は龍神たうがみ 龍人りゆうと

俺はグルメ界で修行を始めて7年、俺は25歳になった

グルメ界はもう俺にとって快適な所になってきた

最初は天候やら猛獣やらで死ぬと思ったけど

そして・・・とんでもないのが俺に懐いちゃった

デーモンデビル大蛇・・・

デビル大蛇の亜種で捕獲レベルは25

俺がご飯の調達に行った時に

阿修羅タイガーに襲われていたので助けたら懐かれてしまった

こいつ見た目はおっかね〜のに結構な甘えん坊だ

だが腕は一流最近

では推定捕獲レベル85のジャックエレファントを倒せるまでに成

長した

なかなかいい相棒だ

少し不気味だがな

因みに名前はジャコウ

「ジャコウそろそろ人間界に戻るけどお前も来るか？」

「ギョルル？」

「どうする？これからビオトープに行つて美食屋になろうと思うんだけど？えつと確か第8でやってた気がする」

「・・・」

ジャコウは何本ある手を組んで考えている

人間くさいなジャコウ・・・

「ギャオルルル!!」

「お!来るか!?!」

ジャコウは勢いよく首を縦に振った

「よし行くか!」

「ギオ`ア`ア`オ`ギャア`ア`!!!!!!」

ジャコウは雄たけびを上げた

「だあ~~~~!!!!うるせ~~~~!!!!耳が~~~~!!!!」

俺はジャコウと共に第8ビオトープに向かった

その途中・・・

「ギユルル」

「ん?どうした?」

ジャコウは自分の頭の上を指で指す

「????乗れってことか?」

「ギユル」

「分かった分かった」

俺はジャンプしジャコウの頭の上に乗って第8ビオトープに向かった

.....

-----第8ビオトープ-----

ビオトープガーデン

通称「庭」

I G Oが動植物の生態調査や繁殖などを目的として世界各地に建造したビオトープ兼超巨大養殖場兼実験場でそれぞれが島1つ分の広大な敷地面積である中でも第1ビオトープに当たるリーガル島は50万k m²（北海道の約6倍）もの面積を誇っているらしい
また、周囲を分厚い壁と堀で取り囲むなど、猛獣が逃げ出さないための措置をとっている

トリコ達四天王のかつての修行場でもある。ここの食材を無許可で庭の外に持ち出すことは重罪とされている
様々な動植物の繁殖に成功してはいるものの、その中には危険な種類も多く

それらの採取・捕獲の手段は確立されていないのが現状のようで、庭の中の食材の捕獲のために美食屋に声がかかることもある

「にしてもでかいな〜」

「ギョル〜」

第8ビオトープ通称「庭」の目の前に俺達はある
ここで美食屋になるためのテストが行われている

「よし行くぜ！ジャコウ！すつすめ〜！！」

「ギョゝアゝアゝオゝ！！！！」

ジャコウに乗ったまま入っていく

第8ビオトープ研究所内

ここでは試験の準備が行われていた
職員がガラスから会場を見ている男に話しかける

「ママママツマンサム所長く〜!!!」

「なにい！ハンサムっていった!？」

「言ってますん!!!」

職員は勢いよく手を顔の前で横に振る

マンサム

I G O 開発局長兼グルメ研究所所長

I G O では会長・副会長に次ぐ実質的なナンバー3の存在と言われている

細かいことにはこだわらない豪放な性格で、名前を呼ばれるたびに「今ハンサムと言った?」

と聞き返したがるが、まわりの人間からは即座に否定される

大変な酒豪で、常に酒の入った瓶を持ち歩いており、フルコースも全て酒に関係したものである

トリコにも劣らぬ筋骨隆々の体格をしているスキンヘッドの中年男で、超人的なパワーを誇る格闘術の達人

得意技は力任せに相手をぶん殴る「フライパンチ」

両手でのフライパンチで相手を挟み込む「フライパンサンドイッチ」
痛覚を麻痺させており、腹や喉元を貫かれたりしても何事も無かつたかのように振る舞う

また、両肩をノッキングすることで筋肉を肥大化させるといった肉体操作も可能なようである

「で何じゃいつたい？」

「はっはい、試験の事でお伝えしたい事が!!!」

「なに!?!ばばはっはっはっは!!!いい奴でもいたか？」

これは名目上は美食屋の認定試験だが

裏ではトリコを始めとする四天王の修行相手

美食會の敵と戦えて捕獲が難しい食材を調達ができる

有力な人物を探さすためでもある

「そそれが!途轍もなく大きい蛇に乗った青年が試験を受けると!」

「蛇?ばっはっはっは!!!そいつは期待できそうだな!おっし!

見に行くぞ!

「はっはい!」

マンサムは試験会場へと向かった

-----試験会場-----

「お〜広いな〜」

「□□□□」

俺の目の前には大勢の美食屋希望者がいる

「ん?ぎゃ〜!!!ななな、何だあのでっかい蛇〜!!!」

まあ驚くの当然か

「あ、あれって伝説の魔獣!デーモンデビル大蛇だ〜!!!」

「なんでそんなのがここに!!」

「おい見る！頭の上に人がいる!!」

「ほんとだ!!!!」

とにかく周りは騒がしかった

「ぬお!!あ、あれはデ、デーモンデビル大蛇!でかい蛇っていうのはあれだったのか・・・

にしてもあの頭に乗っている小僧デーモンデビル大蛇に懐かれてるな、甘えとる」

視線の先には龍人が頭をなで気持ちよさそうにするデーモンデビル大蛇の姿があった

「それにしたいしたもんだあの伝説の魔獣と謳われているデーモンデビル大蛇に懐かれているとは・・・

ばっはっは!!面白いやが来たもんだ!おい!試験が終了したらあいつに会いに行くぞ!

「はっはい!」

マンサムは試験を前にして映画を楽しむように嬉しそうに微笑んだ

「ではこれより試験を始めます、合格方法は簡単、制限時間内に魔獣を一匹でも倒すか

制限時間以内に逃げ切れれば合格となる

では私が出たら試験が始まる、諸君の食運を祈る!!」

職員は会場から出て行った

「まずは様子見だな」

「ギョルル」

そして試験は始まった

ところが・・・

「うわあ~~~~!!!!」

「ぎゃあ~!!」

「た、助けて・・・」

う〜ん・・・カオスだなこの状況

猛獣に追われる者

断末魔をあげて食われる者

倒される者

「さてそろそろ行くか、ジャコウはここで待ってな」

「ギョウウウウ」

え〜みたいな顔をする

「これは俺の試験なんだから分かった？」

「ギョ〜」

ジャコウは渋々承諾してくれた

「ついに動くかあの小僧待ちくたびれたぞ」

マンサムは酒を飲みながら龍人を見る

俺は猛獣が群れている所に突っ込み

「行くぜ！デストロイナツクル！！！」

連続でパンチの衝撃波を飛ばし猛獣たちを仕留めていく

「おお！！衝撃波を飛ばすとはなあ！ばっはっはっはっは！！！！面
白い奴だ！！！」

気がつくとも制限時間は過ぎ試験は終わった

俺はジャコウの頭の上に乗り返ろうとしたら

「ちょっと待てい！！！」

止められた

「ん？なんですか？」

「わしはマンサム、合格おめでとう！どうだデーモンデビル大蛇を
見せてくれた礼にこれからどうだ！宴会でも！」

「マジツすか！？こいつもいいですか？」

俺はジャコウを指差す

「ああもちろんいいぞ！！ただしでかいから外でやるぞ！」

「やった〜！！！」

「ギオッアッアッオッギアッアッ！！！！！」

「だからうるさいって〜の！！！！！」

酒尽くしのフルコースと師匠

俺は今マンサム社長のお言葉に甘えて宴会に参加している
もちろんジャコウも一緒だ

目の前には大量の料理が並んでいた

「おお〜〜〜!!!!」

「ギョルルルル」

「ばっはっはっはっは!!! さあどんどん食べ!大量にあるから遠慮するなよ!わしのフルコースを全部出してやる!」

「所長のフルコースってなんですか?!」

「オードブル 酒盗エスカルゴ! スープ 酒貝のスープ! 魚料理 バッカスシャーク! 肉料理 酒乱牛! メイン バッカスドラゴン! サラダ バッカスオニオン! デザート 酒豪メロン!

ドリンク バッカスホエールの潮だ!」

「すっげえ〜! バッカスドラゴンって超高級食材じゃん!!」

酒盗エスカルゴ (しゅとうえすかるご)

捕獲レベル: 28

酒貝のスープ (しゅかいのすーぷ)

捕獲レベル: 25

酒豪メロン (しゅうめろん)

捕獲レベル: 19

バツカスシャーク (ばつかすしゃーく)

捕獲レベル：31

バツカスオニオン (ばつかすおにおん)

捕獲レベル：15

バツカスホエールの潮 (ばつかすほえーるのしお)

捕獲レベル：33

トリコデータベースに詳しい事が乗っていなかったなので捕獲レベルのみ

バツカスドラゴン (ばつかすどらごん)

バツカス島の主であるドラゴン

超高級食材として知られている

その肉はアルコールを含み、まるでブランデーのような芳醇な味わい

生息地：バツカス島

体長：48メートル

体重：22トン

価格：100g/18万円

酒の楽園と謳われるバツカス島の主として君臨する竜

アルコールを含んだ肉は芳醇なブランデーを思わせる味として有名である

ちなみにバツカスドラゴンは全身にアルコール分を含んでいるため、
20歳以下は食べることを禁止されている

まさに子供にはわからない「大人の味」と呼ぶに相応しい食材である

捕獲レベル：37

分類：翼竜獣類

しゅらんぎゅう
酒乱牛

アルコールを多分に含んでいる（と思われる）極上の肉

食べた者を酒に酔わせ、味に酔わせ、その相乗効果で酩酊させる

生息地：バツカス島

体長：9メートル

体高：3.5メートル

体重：8トン

価格：100g/2万5千円

バツカス島に生息し「酔いどれ暴れ牛」と異名をとる哺乳獣類

バツカス島のアルコールを含んだ湖の水を飲料水としているため、
常に酔っ払ってフラフラしているか、酔えば酔うほど凶暴さが増す

厄介な牛

捕獲レベル：30

分類：哺乳獣類

俺は酒乱牛に手を付けた

「美味しい！何これ！？サーロインの旨みと日本酒のまろやかさその両方を備え持つみたいだ！」

マンサムはビアロブスターにかぶりついた

ビアロブスター（びあるぶすたー）

殻の中には、ぷるぷるの身がつまっている
ビールのツマミに最適

生息地：温暖な海域

体長：55cm

体重：2kg

価格：1匹/9万円

伊勢海老の一種でアカザエビ科

温暖な海域に生息し、その身はプリプリと引き締まって歯ごたえ抜群
味はそのままでも天然の塩気がきいているため、その名の通りビー
ルのツマミにピッタリの食材である

捕獲レベル：1以下

分類：甲殻類

「うーんこのプリップリ歯ごたえ！この塩加減！美味い！！酒が進むわい！」

マンサム所長はジョッキに注いであったビールをがぶ飲みした

「ギョルルルルル」

「美味いな」

「あーそうだお前な名前は？」

「龍神 龍人です」

「龍神か、良い名だ、龍人はこれからどうする気だ？」

「うんとりあえず修行でもしようかな〜って考えてます」
「ではいい師匠を紹介してやろう」
「え？誰ですか？」
「IGO会長 一龍さんだ」
「え〜！！会長って！！？」
「ギョル？」

一龍会長といえばこのグルメ時代トップに立つ人間といっても過言ではない

「なんでそんな人が俺の師匠に？」
「試験の事を上に報告したら会長がお前さんに興味を持ったんだ」
「あつなるほど」
「明日にでも行つて来い！」
「明日！？」
「早いほうがいいだろう？」
「まあそうですね」
「おっし！そうとなれば乾杯だ〜！！！」
「さつきからずっと飲んでるじゃないですか？」
「細かい事は気にするな！ばっはっはっはっはっは！！！」

その後一日中宴会は続いた・・・

次の日

俺は所長のご好意で会長のいる家まで送ってもらった
周りはガラスのように澄んだ海に囲まれた小さく別荘って感じだ
俺はインターホンを押す
ピ〜ンポ〜ン
すると中から小柄な男が出てきた

「これは！これは！お待ちしておりました龍人様！ささ会長がお待ちですどうぞ此方へ！」

俺は案内されるまま歩いた

するとテラスについた

なんかパラソルが建ってるな

「あそこに居られるのが会長で御座いますでは私はこれで」

男は下がった

「……（まずは挨拶だな）お初にお目にかかります会長、俺はじやなくて！」

私の名前は龍神 龍人と申します」

「おお、お主が龍人君か？」

「はい」

パラソルの下のいたのは国際グルメ機関IGO会長 一龍さんだった

いちりゅう
しゅう
一龍

IGO会長

トリコ達「四天王」の師匠で、彼らの親代わりでもあった模様（トリコは一龍を「オヤジ」と呼んでいる）

見た目は派手でお調子者だが、弟子達の事を絶えず気にかける深い思いやりを持った老人

約500年前に美食神アカシアの一番弟子であったと語っており、正確な年齢は不明

すでに美食屋を引退している身であるが、その驚異的な身体能力と

戦闘力はいまだ衰えていない
トリコが「四天王」と呼ばれるようになった今でもトリコを完全に
子供扱いしており
アイスヘルでの死闘を乗り越えてパワーアップしたトリコの全力の
技を簡単にあしらうほどの強さを誇っている
GODの出現がアカシアの予想通りに新たな戦争を招くであろう事
態を危惧し、戦争の勃発を事前に阻止するため、自らの命を賭けて
最後の使命に臨もうとしている

見た目はチーターのような模様のシャツを着てサングラスをかけた
ている

・・・ファンキー派手だな

「マンサムの話だとデーモンデビル大蛇を相棒にしていると聞くが
どこでじゃ?」

「グルメ界です」

俺は即答した

「ほう、グルメ界で」

「はい、ジャコウは俺が食量の調達をしている時に阿修羅タイガー
に襲われていたのを助けたら
懐かれたんです」

「なるほどのどの程度強いかの?」

「え〜と・・・ジャックエレファントを簡単に倒せるまでに成長し
ました」

「!ほう・・・捕獲レベル85をの〜因みに君をどの程度グルメ界
にいた?」

「7年です」

「随分と長いな、では実力は十分というわけか・・・よし!」

会長は立ち上がり手のひらを俺に向けてきた

「？」

「お主の技を打ってみい」

「どこで？」

「そっじゃ遠慮はいらんぞ？」

「では……」

俺は集中し右腕に力を込め武装色の覇気を右腕に纏わせ腕を高速回転させる

「ほお！腕を高速回転させる事ができるとはな」

「うお〜！！玄武金剛弾！！」

玄武剛弾の強化版を会長の手に決める

だが手は10数センチほど後ろに下がっただけだった

「ほう！！トリコの釘パンチを遥かに上回るほどの威力だ」

「うっそ〜……ぜんぜん効いてない……」

「少し堪えたぞ、腕が痺れてしまったわい」

「痺れただけですか……」

マジでシヨックだ

玄武金剛弾はジャックエレファントを一撃で粉碎するパワーなのに腕が痺れる程度とは……

「弟子になるには合格じゃこれからもっと強くしてやるぞ」

「はい！お願いしますー！」

「じゃあまずは第1ビオトープに行ってロックドラムを捕獲してき

てくれ」

「ロックドラムを？」

「後ピグマ、バラック、ドムもじゃぞ？」

「増えた!？」

「じゃあ龍ちゃん 頑張るんじゃぞ」

「はい……………」

俺は渋谷第1ビオトープに向かった

キャラ紹介

たつがみりゅうと
龍神龍人

性別 男

年齢 転生前 18歳 転生後 18歳 グルメ界での修行終了時
了時 25歳

身長 転生前 185cm グルメ界での修行終了時 218cm
(グルメ界の食材が栄養が豊富だったため)

体重 転生前 69kg グルメ界での修行終了時 98kg 四
天王の三人より軽い

容姿 上の上 性格が優しいためとてもモテた、だが男子生徒からは嫉妬の目で見られていた 服装は黒い長ズボン

腕や脇腹の部分に赤と黒の龍が描かれている服を愛用している

引用 技などはスパロボのソウルゲインの技をよく使う(人体でやりやすいから)

身体能力はMAX

能力は知っているアニメ、漫画、小説、ゲームの技、力が全て使える

イメージしただけでその姿になれる変身能力

どんな怪我や病気も心の病もどんな物でも治療、修復できる

能力

だが基本的にはソウルゲインの腕や剣などを作り出すだけ

ジャコウ

デーモンデビル大蛇

推定捕獲レベル 88 (ジャックエレファントを倒したため) 通常
は 25

阿修羅タイガーに襲われていた時に龍人がご飯の調達をして
いた時に助けられそれ以来龍人に懐いた

龍人のためなら危険を省みずに戦う

性格は甘えん坊

戦いとなると牙をむく

好物はホワイトアツプルとカニ豚、ピグマ、ブラックカーペ

ツト

グルメ界でも野菜を食べていた

龍人に頭に乗ってもらうのと撫でられるのが大好き

体長は 48メートル

体重は 19トン

通常のデーモンデビル大蛇より鋭いピット器官と牙と爪

3つの眼はとてもよく暗闇でココほどではないが見える

ダメージを受けても瞬時に肉体が再生する万能細胞を持って

いるが

さらに龍人がグルメ細胞を与えた

頭を吹き飛ばされても再生することが可能となった

毒もココ並の毒を生成することができるようになった

皮膚も縮めなくてもトリコのナイフも傷ひとつ付かなくなっ

た

妹

俺は第1ピオトープから帰った後師匠の3ヶ月特訓を受けていた
それで筋がいいといわれて3日間の暇を貰った

俺はグルメフォーチュンの近くの草原に寝そべっている
ジャコウは俺の近くで眠っている

「・・・はあ、この世界に来てもう7年以上もたつのか・・・」

俺が死亡して神の手によってこの世界に来て既に7年に以上もの時
が流れた

「にして大変だったな〜最初はいきなりガララワニでその次は修行
で行ったグルメ界でデビル大蛇に阿修羅タイガー
7年間もグルメ界で修行してそれから美食屋になって師匠の弟子に
なっているんな食材とったり酒飲んだり師匠にボコられたり考えて
みるといろいろな事があって死に掛けたり濃厚すぎる毎日だったな〜」

俺はよく今まで自殺しなかったな〜っと思う
いろんな事があつたけど一番の願いがある
絶対に無理な事だ
でも望んでしまう

「・・・優奈・・・」

妹に会いたい

自分で言うのも別にシスコンってわけじゃない

俺のたつた一人の家族だ

だから会いたい・・・

？

「あれ？おかしいな？涙が出てきちゃったよ・・・そうか俺・・・寂しいんだな・・・」

ジャコウは俺の様子に気がついたのか顔を舐めてきた

「ジャコウ・・・ありがとな俺の相棒で居てくれてありがとな」
「ギョルルル」

ジャコウは俺が笑うと安心したのかまた眠りに着いた
すると後ろから誰か来た

やっべ、ジャコウみたら絶対に恐がるわ

その人は女性だった

外人を思わせる長く金髪 of 髪

茶色の瞳

まるでリリカルなのはのフェイトのような人だ

え？いやいやいやそれはないって

その人はジャコウよりも俺の顔を見ると驚いて泣き出した
え！？俺なんかした！？

なに！？デーモンデビル大蛇のジャコウいるから！？

「お・・・い・・・や・・・」

声が小さくて聞き取れないな

「お兄ちゃん！！！！」

その人は俺にダッシュしてきて抱きついてきた

「え！？お、お兄ちゃんつて！！ま、まさか優奈！！??」

「うわあああん！！！！会いたかったよ！！！！龍人おにいちゃん！！！！」

「おい！本当に優奈なのか！！?」

「うん！！正真正銘のおにいちゃんの妹の龍神優奈だよ！！！！！！」

優奈は泣きながら俺をもう二度と放さんばかりに俺を抱きしめてくる

「うわあああくん！！！！うわあああ！！！！お兄ちゃん！！！！」

「優奈・・・優奈・・・俺も・・・会いたかった・・・」

俺も自然と優奈を抱きしめた

その状態のまま15分は経過した

「落ち着いたか？優奈？」

「うん」

「そうか・・・でもなんでお前がこの世界に・・・」

「お兄ちゃん死んじゃって目の前が真っ暗になったの、そしたら神様が私の願いを叶えてくれるって言うてくれたの」

「（神様・・・俺の願い聞いてくれたんですね・・・）」

「私はお兄ちゃんのそばに居たいいったのそれでお兄ちゃんに劣るけど能力を貰って13歳にしてもらってこの世界に来たの」

「なぜ13?」

「だって13歳にお兄ちゃんが良い物くれるって言うてたじゃない」

「ああそういう事」

「それで優奈はまずは力を付けるためにグルメ界で能力を駆使して5年間修行したの

それで自信がついたから美食屋になって生活費を稼ぎながらお兄ちゃんの情報を集めてたの」

「なるほどな」

「でもぜんぜん集まらなかったの」

「そりゃそうさ俺は7年間グルメ界に居たんだから」

「そうなの？でもお兄ちゃんに会えてよかった本当に・・・グスッ」

「ホラホラ泣かないのこつやつて会えたんだからいいじゃないか」

「うんでもこの7年間寂しかったよおおにいちちゃん！！」

もう優奈をひとりにしないでよお・・・

優奈の傍に居てよお・・・

おにいちやああん・・・」

俺は優奈の辛さと悲しさを理解した

俺はそつと優しく優奈を抱きしめた

「お、にいちちゃん？」

「優奈、お前はとうしようもない馬鹿だな、俺の傍に居たいから追ってきたあ？何言ってるんだよお前は？」

後先考えず行動するのはお前の悪い癖だな、だけどありがとう俺も優奈に会いたかった

どんなどんなに望んでもお前には会えないそんな現実には辛かったただ一人の家族に会えないなんて辛すぎる・・・

だけどこれからは一緒だ、一緒にご飯を食べよう、一緒に歩こう、一緒に居よう、お前が望むなら俺は優奈の傍にいる」

「本当？一緒にいていいの？」

「ああ優奈が望むならな」

「望むよ！お兄ちゃんと一緒に居たい！！」

「はいわかりました、後ジャコウ、何ニヤけてるんだよ」

ジャコウは俺たちのほうを向いてニヤニヤしている

コイツ本当に人間くさいな

「お兄ちゃんこの子デーモンデビル大蛇だよね？なんでこんな所にいるの？」

「コイツはジャコウグルメ界であつた俺の相棒だ」

「へえ、宜しくねジャコウ」

「ギョルルルル」

「あはははお腹が減つたみたな鳴き声だね」

この後俺は師匠の所に向き優奈を生き別れた妹と説明して弟子にしてもらつた

やれやれこれからの人生大変そうだ、はあ・・・

ついに原作突入！虹の実を探れ！

師匠の下で修行を始めてすでに7ヶ月

ちよっと前までトリコ達の修行相手として俺は抜擢された

ゼブラは居なかったが

それにしても皆の素質は途轍もなく高かった

流石は四天王だ

トリコのナイフで腕が切断されようになっただし

ココの毒は神経毒で痛かったし

サニーはヘアロックしてきたりするし

まあとにかくと筋は良かった、まだまだけどな

俺と優奈は修行一区切りになると言われて暫らくの暇を貰った

優奈はこの休みを利用してライフでのんびりすると言って出かけていった

一応癒しの国だしね

俺はとりあえず休み中の費用を稼ぐために沼蛇を捕獲しこのグルメ

市場中央卸売市場に来ている

沼蛇を売るためだ

すると人だかりができています

「なんだ？」

俺が顔のぞかせるとトリコがシャクレノドンを地面に下ろしていた

シャクレノドン

山奥の洞窟に棲むドラゴン

巣穴に骨が転がっていたことから、肉食と思われる

体重は約1トン

トリコはトムとkg単価3〜4万円で取引をしていたが通常のグルメ相場では、もっと高価のようだ

生息地：山岳地帯、崖

体長：5メートル

体高：3メートル

体重：1.5トン

価格：100g/9000円

山岳地帯や崖の洞窟などに棲息する翼竜獣類

顎がしゃくれているために「シャクレノドン」と呼ばれているが、そのユニークな名前とは裏腹に部位によっては卸値で1キロ6万円する高級食材でもある。肉以外にも骨から非常にコクが深い良いダシが出るため、シャクレノドンの骨からダシをとった「シャクレラーメン」は舌が肥えたラーメンマニアたちの間でも人気を博している

捕獲レベル：4

分類：翼竜獣類

「トリコ久しぶり」

「お〜！龍じゃね〜か！何だお前も来てたのか」

「ああ、沼蛇を捕獲してさ売りに来たんだ」

「でえ〜！？沼蛇〜！？捕獲レベル5！トリコさんが捕獲したシャクレノドンより上ですよ〜！？」

「相変わらずのノッキングの腕だな」

「まあね」

「凄い！捕獲レベル5の沼蛇を簡単に捕獲するなんて〜！しかも力リスマ美食屋トリコもいる！なんててんこ盛りな美味しいユース！あんたがトリコね？私ティナ！」

「あ？」

「へ？」

「私グルメTVで世界のあらゆる食材を紹介するグルメキャスターなの！トリコ！番組で取材させて！そっちの貴方も！」

「俺？」

「勝手な取材は困りますね」

ヨハネスが取材を拒否しティナはどこかに連れて行かれた

「何もあそこまでしなくても・・・それにトリコさんこの人は？」

「ああコイツは龍神 龍人 IGO会長の弟子だ」

「え〜〜！！！！か、会長さんの弟子い〜〜！！！！？」

驚きすぎだろ小松君

「こんにちわ俺は龍神 龍人だ宜しくね」

「は、はい僕はホテルグルメでコック長をやらせてもらっている小松と申します」

「宜しくそういえばヨハネスなんでここに？」

「虹の実が実ったのでトリコさんに依頼を」

「なに！？」

俺とトリコは声を合わせて驚いた

「に、虹の実！！気温や湿度に合わせて七色に変化すると言われて
いる幻の木の実ですかあ〜〜！！？」

「ちょ！声がでかいぞ！誰かに聞かれたら・・・！！」

虹の実 (にじのみ)

気温や湿度によって七色に味を変える幻の木の実に、自然界では絶滅したと言われている

I G O が品種改良し、第8ビオトープで実をつけるのに成功したしかし、重さは900kgほどの実が地上数十メートルの位置に鈴なりに生るのだから、並みの美食屋では収穫すらできないだろう虹の実に香りを嗅いだ動物は、反射的に「食べたい」という欲求に支配され、命の危険をも顧みず、その実を食べようとする。理性を忘れるほどの魅力・魅惑は、恋のそれに近いという

25メートルプールの水に、ほんの一滴、その果汁を垂らすだけで、プール内の水がすべて濃厚で芳醇なジュースに変わってしまうほど果汁濃度が高い

適当な大きさに切り分けられた実から蒸発した果汁は虹を作り、目を楽しませてくれる。

プリンのようにやわらかいが、金のごとき重量感もある
実の温度を保つ際には5℃が最適とされており、微妙な温度変化で味が変化する

完熟マンゴー数百個を凝縮したような糖度、レモンやキウイを凌駕する酸味、甘栗のごとき香ばしさなど、口内で7段階に味を変える爆発的な存在感は、「うまい」の一言に尽きる

現在はI G O による人工生産が可能

生息地：栄養豊富な土地（I G O 第8ビオトープ内）

体長：1メートル

体高：-

体重：1.5トン〜2トン

価格：1個/約5億円

絶滅したとの噂も流れたが、I G O ビオトープガーデンで生息している幻の果実

口にすると体内で味が七段階で変化し、空気中で蒸発した果汁は七

色の虹を架けることから、その名前がついた。虹の実は果汁一滴で25メートルプールほどの水を果汁ジュースに変えてしまうほど、高濃度のため、食べ過ぎると鼻血が出るので要注意
また、果汁をリキュールで割って作る「レインボーカクテル」は、奇跡のカクテルといわれ、すべてのバーテンダーにとって羨望の的である

捕獲レベル：12

分類：果実

「問題があり収穫ができないのです、トルコングが虹の木に巣をつくり近づけないのです」

「トルコングウー!!!??」

トルコング

IGOにより品種改良された、最強のゴリラ
濃緑色の体毛と薄紅色の皮膚をもつ

4本の腕は、移動と攻撃を同時に行うことを可能にする
肉は筋つぼく不味いらしい(トリコ談)

その食性は完全に肉食で、動物の肉しか食べない

知能が高く、落とし穴を掘る・毒へびを投げつけるなど、獲物を畏にかけることもしばしば

トルコングの群れは、頭トルコングを中心とした完全な縦社会であり、頭トルコの制圧に成功すれば群れ全体を制圧することができる

生息地：主にIGOビオトープ内

体長：-

体高：4.5メートル

体重：2トン

価格：100g / 5500円

I GOビオトープガーデン内に生息し、群れをなして生活する肉は筋ばって食べられたものではないが、脳ミソは独特の旨味で、一部の愛好家からは珍味として重宝されている

持ち前の腕力のほかに猿特有の高い知能を持ち合わせているため、戦闘では単純な打撃攻撃以上に、落とし穴や飛び道具攻撃などの狡猾な攻撃が厄介である

また、群れの中で明確な縦社会が確立されており、ボスの命令には絶対服従という掟が存在しているが、個々の個性も尊重（アーススタイルなど）されており、どこことなく人間社会に近い集団である

捕獲レベル：9

分類：哺乳獣類

「捕獲の難しさが9!!?!?この前の300歳のガララワニが捕獲レベル8ですよ!!?!?」

「虹の実食ってみて〜し久しぶりに行くか懐かしき庭によ、龍も来るか?」

「じゃあ行くこうかな?」

俺はトリコに同行して虹の実の捕獲に向かった

第8ビオトープに着いたら直ぐにトリコが威嚇のために壁に3連釘パンチで壁を壊し入っていった

「雨が降りそうだな」

「え〜雨嫌いだよ〜」

「虹の実の木は高いから雷でも落ちたら大変だぜ」

「じゃあ急ぐか」

「はい！」

トリコがジャンプして着地するとボコッ！

「え！？」

「あ」

「落とし穴あ！！？」

すると上から岩が降ってきた

トルコングだ

小松君はビビッているので俺はファイティングポーズを取り玄武剛弾を放とうとしたらトリコがノッキングを行った

「おゝノッキングの腕あがったね」

「お前ほどじゃねゝよけど舐められてにおいが染み付いちゃったぜ」

この後は原作どおりにシルバーバックを手なずけた

「これが・・・虹の実・・・」

「ああさあ1個持って帰ろうぜ」

「そうだな行こう小松君」

「は、はい」

トリコが取ったらヨハネスが来てこっそり着いてきたティナを連行した

今はホテルグルメで食事をしている

「にしてもトリコよく食うな」

トリコの周りには皿が山盛りになされていた

「だって美味しいんだぜ？」

「まあわかるけどさ」

そして小松君が虹の実を持ってきてトリコが食べフルコースのデザートに決定した

「なあ龍、お前は食わなくていいのか？」

「ふっ捕獲したのはトリコお前だ、俺の分も食っていいぜ」

「おお！サンキュー！」

こうしてトリコは虹の実を堪能した

四天王ココ登場！

俺は今トリコと小松君と共に列車に乗っている

なぜかというところ今の時期に幻の魚フグ鯨が深海から浅瀬に上がってきて産卵をするからだ

その時だけが捕獲する事が可能で俺は興味本位でトリコ達に同行した今は酒を飲んでいる

「あ〜うめ〜」

トリコは酒の入ったビンの中身を一気に飲み干した

「車内販売のお酒全部飲むつもりですか？龍さんだってそんなに飲んでないのに」

「いや〜嬉しくてな〜もうすぐ幻の魚フグ鯨に会えると思うとよ〜！龍達もそうだろう!？」

「まあね」

「ええ！それはもちろん！深海の珍味といわれるフグ鯨が浅瀬に姿を現すのは10年に一度ちょうどこの時期だけですからね」

「淡雪のような繊細のフグの身と！脂の乗ったマグロの大トロ！そして鯨の肉を併せ持つ絶妙な味！

たまんねえ〜！！まあ小松は食うよりもフグ鯨を捌ける奴に興味があるんだろ？」

「わ、分かってましたか？」

「フグ鯨はたしか特殊調理食材に指定されてたな」

「ええ、フグ鯨の体内の毒袋を取り除くのは難しく特殊調理食材に指定されるほど」

フグ鯨 (ふぐくじら)

深海の珍味と呼ばれる幻の鯨

卵からかえり成魚になるまで（3〜4年）は浅瀬で過ごし、その後は深海で過ごす

肺とエラ両方を持ち合わせるフグ鯨は、浅瀬での3〜4年で体長6メートルにも成長するが、深海へ移動する際、水圧で肺は潰れ、体長も30〜40cmまで圧縮される

これにより旨みが凝縮され、最高の味を生むという

：ただし、それと同時に巨体が持つ大量の老廃物も同時に凝縮され、それが“毒袋”となるのだ

「皮」乾燥させると1世紀以上鮮度は落ちず保存できる

「身」ピンク色の身は、もち肌のようにしっとりとした歯ごたえ。

小売で100g92万円

「背ヒレ」フグ鯨特有のダシがとれる 毎日とっても約3年は新鮮なダシが出続ける

「舌」上質な脂肪分が凝縮しており、熱するとサラサラの油に変化。丸1年は古くならず揚げ物でも繰り返し使える

「内臓」各種滋養強壮に効果あり 生で食べると、10日間、不眠不休で働いても疲れない程の精力が得られる

「ヒレ」超辛口の熱燗でヒレ酒にすると絶品 1杯で1週間はほろ酔いが続く

毒袋

一度、破れると一瞬にして全身が毒化し、食べると30分〜1時間

で死に至る

致死量0.2mg、マウスにして10万匹を殺す猛毒

しかも個体により毒袋の位置が全く違うため、完璧に破かずに除去できる料理人は、世界に10人もいないと言われる

I G Oの定める「グルメ八法」により、毒化したフグ鯨の流通は禁止されているが、毒化しても味は変わらないという理由から、闇ルートで毒化フグ鯨は大量に出回る

「死んでも食べてみたい食材」として、多い年で10万人が中毒で亡くなるという

特殊調理食材に指定されている

産卵時にはフグと同じくらいの大ささしかないので「ミジンコ鯨」とも呼ばれる

普段は深海ふかくに生息している為、捕獲のチャンスは10年に一度の産卵期のみ

しかも近年の産卵場は「洞窟の砂浜」に限定されている

浅瀬では身を寄せ合って泳ぎ、まるで巨大な1頭のクジラのように見せかけて外敵から身を守る

非常に繊細で、ほんの僅かな刺激を受けただけで“ぶわお”と毒化してしまう。ノッキングの壺は、エラから頭部の中心へ、斜め45度の角度

個体により毒袋の位置が異なり、毒袋の位置により捌く手順が変わってくる

その何百通りもある捌き方を正確に記憶した上で、ミリ単位の正確な包丁捌きができなければ、フグ鯨は簡単に毒化してしまう。毒袋の除去に成功したフグ鯨は、まばゆく輝き出す

毒化していないフグ鯨の末端相場は約1億円

毒袋を完全に取り除くと5億円

毒化した場合は0円だが、闇ルートで約800万円の値がつく。

フグ鯨の刺身は、ピンク色をしており、霜降り牛肉のように脂が乗っている
噛み締めると口いっぱい脂の旨みが広がり、噛めば噛むほど香りと味が高まり、まるで深海のように底の見えない、終わらない至福をもたらす

生息地：普段は深海だが、10年に1度の産卵期には浅瀬に浮上する
体長：50cm～60cm
体高：-
体重：5kg～7kg
価格：肉は100g/92万円

「深海の珍珠」と呼ばれる幻の鯨

幼魚の頃は浅瀬で生息するが、成魚になると深海に移動する
水圧差で約6mの体長が50cm～60cmにまで圧縮されるため、その身は旨味が凝縮され最高の味を生み出すといわれる
ただし、体内の老廃物も同時に凝縮されるため、その老廃物が毒袋となり致死性が高い猛毒になる
毒袋は一度破れると一瞬にしてフグ鯨の全身に毒が回ってしまう
しかも個体により毒袋の位置が全く違うため完璧に破かず除去できる料理人は世界に10人もいないといわれる
IGOが定めるグルメ八法により毒化したフグ鯨の流通は禁止されているが、毒化しても味は変わらないという理由から闇ルートで毒化フグ鯨が大量に出回り、その毒化したフグ鯨によって多い年で約10万人が中毒で亡くなるという
まさにフグ鯨が「死んでも食べてみたい食材」と称される所以である。ちなみに毒袋を取り除いた個体は末端相場で5億。毒化しても闇ルートで800万円程で取引されている

捕獲レベル：29
分類：魚乳類

「ああ、捌ける奴は世界に10人といない、まあこれから会いに行く奴は料理人じゃね〜けどな」
「え？」

トリコは再び酒に手を付ける

「おいこらあ〜！」
「あ？」

いきなり少しは背が高くいかにも田舎から出てきたような男が怒鳴り込んできた

「酒が少な〜っと思ったたらこんな所に沢山あるじゃね〜か！舐めやがって！俺は美食屋ゾンゲ様だぞ！ゴラァ〜！」

「あ〜ん？ふう〜龍聞いたことあるか？」

情報通である俺に聞いてきた

「いや微塵も聞いたことない」

「やいやいやいやい！」

「見て驚けよ！ゾンゲ様の人生のフルコースを！」

「オードブルは金色イクラ！（捕獲レベル2） スープはヘビガエルの肝スープ！・・・」

「普段僕が料理で使う食材ばかりだ・・・」

「捕獲レベルも低い、たいした事ははない」

「そつえば龍さんはフルコース決まってるですか？」

「2つだけね」

「なんですか!？」
「オードブル ヘルフォートレス 魚料理 鰐鮫だけだよ」
「わ、鰐鮫って捕獲レベル27ですよ!？でもヘルフォートレスって何ですか?聞いた事ありませんが・・・」
「まあそれはそうだろうヘルフォートレスはワールドキッチンにも入ってこない食材だからね」

鰐鮫

180 度開口できる大きな口を持つ 魚獣類
鰐並の 強力な 顎力で 一度 喰らいついた 獲物は 決して 放さない
その捕獲レベルは 弱肉強食の 食物連鎖で知 られる、いにしえの 沼地でも 一、二を 争うほど 高さを 誇り
まさに沼の主に相応しい実力者である
また、その 肉は 高級で 刺身でもクセがなく 食べられるとか

捕獲レベル: 27
分類: 魚獣類
生息地: 沼地から 海まで 広く(ひろ) 生息する
体長: 43 m
体重: 27t
価格: 100g / 4 万7000 円

ヘルフォートレス (オリジナル)

グルメ界に根を下ろす最強の米

ET米より味が深く濃厚な味がする

何も付けなくても米からあふれ出す甘みとほんの少しの辛味が絶妙にマッチして口に入れた瞬間

意識が飛んでしまっほどの旨みを持つ

その米のとき汁は美容と滋養強壯の栄養を多く含みゆっくり温める事によって圧倒的な輝きを放ち

口にしたら全身の疲れ、肌荒れ、枝毛、疲労回復、肩こり、血行を良くするなどの様々な効果がある

だが収穫するのは難しい

稲はBBコーンより硬く糠も取るには滝並みの水流の強さがないと取れない

グルメ界の猛獣たちもめつたに食べる事ができない

名前の由来は生息する場所が断崖絶壁の崖の上に根を下ろしているその崖の下は猛獣たちが食物連鎖を繰り広げており骨や血で溢れている

その光景からその崖が地獄に聳え立つ巨大な要塞に見えたためこの名がついた

捕獲レベル：測定不能

気がつくともゾンビ・・・だったけ？

酒を受け取り去った

その後は次郎が来て酒を渡して俺はトリコ達と雑談をして到着するのを待った

そして

—————グルメフォーチュン—————

「はあ〜ここにフグ鯨を捌ける人がいるんですね〜ってか人がぜんぜんいない」

街には人っ子一人いない

いわばがら〜ん状態

「猛獣の出る時間だね」

「ああ、ここの居る占い師が猛獣の出る時間帯を占うんだ、その時間住民は家に隠れてるって話だ」

「って言ってるそばから来たぞ」

建物の間から出てきたのはクエンドン

クエンドン

捕獲レベル：10

翼竜獣類

「煮て焼いても食えね〜クエンドンか」

「俺がやってこようか？」

「いやその必要はないだろう」

トリコが道の向こうを指差す

その先には一人の人が歩いてきた

クエンドンも気付いたようでそちらを向く

その人がクエンドンの前をと通り過ぎようとした時

クエンドンは噛み付こうとした

「あ、危ない!!」

声小松君はを上げるがクエンドンはあと少しの所で止まり

その人が前を通り過ぎるとその場を去っていった

そしてその人がこちらに来た

「僕の占い通りだ、嫌な客と嬉しい客が来たものだ」

「へっ！お出迎えとは嬉しいね流石四天王一の優男だなココー！」
「ふっ！四天王一の食いしん坊トリコ！久しぶりだね！そして君にあえて嬉しいよ僕の大親友、龍！！」
「久しぶりだなココ」
「トリコさん、龍さんまさか会いに来た人って四天王美食屋ココ！
！??？」

四天王ココ登場！（後書き）

オリジナルの食材を出しました

鰐鮫に関してはコミックを見たため読み方を入れました

不吉な占い

俺達は今ココの家に向かって歩いてる

「もう直ぐ僕の家だから」

「はあはあ・・・」

小松君は息が上がっている

「でも四天王のココさんがなぜ占いの街のグルメフォーチュンに？」

「今僕の本業は占い師だからね」

「四天王が占い？」

まあ意外だろうな

「そういえばゼブラの奴はどうした？龍知ってるか？」

「いや、最近は忙しくてねゼブラの事は入ってこないんだ、ココ知ってるか？」

「捕まったよ今はグルメ刑務所だ」

「はははついに捕まったかあの問題児」

「まったたく」

トリコはあさつての方向を向いた

「思い出すぜえ4人でよお死にぐもぬるいで庭で修行した頃お」

「昔の話だよ」

「はあはあ・・・」

小松君が俺達に追いついた頃に俺達の立っている場所が陰になった

上を見ると巨大な鳥が俺達の上を巡回していた

「カラスのオバケエ〜!?!」

「迎えに来てくれたのかい? キツス!?!」

「おお! 空の番長エンペラークロウ! 絶滅種じゃね〜か!」
「ええ〜!?!」

エンペラークロウ えんぺらーくろう

「空の番長」と呼ばれる巨大なカラス

生息地：絶滅種とされているが「グルメ界」のどこかに今でも生息
体長：8.5メートル（キツス）

体高：3メートル（キツス）

体重：570kg^{キツス}

価格：100g/90万円

「空の番長」と称される絶滅種

カラスならではの高い知能を持つため、飼い馴らせば人間の命令を理解することができる

エンペラークロウの唯一の生き残りといわれるキツスは、ココの大事な家族の一員で、雛の頃からココに育てられたらしい

絶滅種とされているが、地上のどこかに存在する「グルメ界」には今なおエンペラークロウが生存しているとの噂だが真偽のひとは定かではない

キツスはココの言葉を理解し、意見疎通を図ることができる

「僕の家族キツスさ、4人運べるかい?」

「グワア〜」

俺達はキッスの背中に乗りココの家に向かった

ココの家

「僕も賛成だな虹の実をデザートにしたのはまあ僕の占いどつりになつたわけだけだ」

ココが話している間もトリコはココの出してくれた料理を食い続ける

「つゝかもつと龍みたいに上品に」

俺は静かにゆっくりと食べている

「で？お前はどうかなんだよ？人生のフルコースは完成したのかあ？」

「ああ僕のメニューはリードラゴンの涙のスープやオブレオカジキのステーキなど

栄養バランスのいいメニューを揃えてある、決まってないのはオードブル、メイン、ドリンクの3つさ」

「どれも捕獲レベルも高く値もつけられない物ばかり」

「そんな話をしに来たんじゃないだろう用件は仕事依頼フグ鯨の捕獲だね」

「さすが話が早え」

「難しい仕事だね僕でも毒化せずに捕獲したとしてそのまま捌くとして僕で1割程度」

「そんだけありや十分俺じゃ一匹も捌けないだろうからな」

「威張る事か？それ？」

「さらに残念なデータがある」

「洞窟は全長数十キロ深さは800メートルもあり猛獣もいるそして一番めんどいのデビル大蛇だ」

「龍知ってたのかい？」

「まあねだけど俺も相棒に比べたらデビル大蛇なんか可愛いもんだ」

「ん？龍の相棒って確か・・・ジャコウって名前だっけ？」

「ああそうだ」

「そういえばどんな奴なんだい？」

「気になる？」

「・・・気になる（なります）」

「じゃあ教えてあげるよ俺の相棒は・・・」

「・・・相棒は？」

「デEMONデビル大蛇」

「・・・」

あり？なんか拙い事言った？

「・・・なに〜！！！！？？？」

「うわあ！なんだよ！大声出して！」

「出ずに決まってるんだろ！」

「デEMONデビル大蛇と言えば！デビル大蛇の亜種でデビル大蛇に
より強いって言う奴で伝説の魔獣と謳われるほどの奴じゃないか！

「！」

「ココ！エンペラークロウを相棒にしてるお前に言われたくね〜よ
！」

そんなやり取りがあり俺達は洞窟に向かった

ノッキングマスターとの再会(前書き)

久しぶりの投稿です

ノッキングマスターとの再会

俺達はフグ鯨の産卵場所である洞窟に向かっている

そしてなぜかグルメTVのティナいた

ココを撮ろうとしたらココは拒否した

やっぱりな・・・毒の事を俺に相談してきたりしたからな

「なんか・・・不穏な空気が・・・」

小松君が洞窟の周りに居る武器などを持った人たちを見て言葉を漏らす

「美食屋が捕獲したフグ鯨を横取りしようという連中だろう」

「洞窟から戻ってこれても危険なんですね・・・」

「大丈夫だよ俺が居るし」

「ほぼ全員に死相が見える・・・」

そんなこんなで洞窟の入り口に到着

深く真つ暗だ・・・

まあ俺の目もココと同じだからはっきり見えるけどね

「ひいゝ！！！！やっぱり恐いゝ！！！！」

「（この洞窟に居る何かに命を取られるというのか？）」

「さあ〜て出発するとすつか」

「おう」

「はい！」

「幻の魚フグ鯨・・・」

「あん？」

「え？」

いきなりティナが声を上げる

「どんな食材が知りたい・・・あたしが知りたいんだから世界のみんなが知りたいはずよ」

いや・・・なんでそうなる？可笑しくね？

「この私がフグ鯨の美味しいニュースを教えてあげるの！」

「そう言われてもだね・・・」

「ついてなら勝手にすればいい、思い立ったが吉日・・・その日以降は全て凶日だぜ」

結局ティナも付いてきて俺達は洞窟の中に進んでいった

「あ！ポキポキキノコだあ！！！」

「マジでか！！」

小松君とトリコはポキポキキノコが生えているほうに駆けていった
トリコはキノコを食べ始める

「おゝ！！このポキポキの菌ごたえ・・・くうくう！！最高だぜえく
く！！！」

「ココさくん！龍さくん！ここいっぱい生えてますよ！！！」

「だから離れるなって・・・」

「ははは・・・小松君はコックの血が騒ぐのか食材を見るとついそ
つちに意識が行っちゃうのさ」

この後確か・・・死霊のはらわた・・・だっけ？が巨大ヤスデから
逃げていった

ティナは死霊のはらわたがフグ鯨を捕獲したという嘘に騙されて見せてもらおうと一緒に洞窟から出ていた
俺達はスルーして進む事にした

ココを先頭に進んでいく

所々エメラルドのような水晶が顔を覗かせている

「随分狭くなってきましたね・・・」

「ああでも間違いないね・・・」

トリコはすうすうと鼻から息を吸い込む

「僅かだが潮の香りがする」

「相変わらず凄い鼻ですね、それにしてもココさん明かりもなしによく進めますね」

「ココにはな人間には見えない赤外線から弱い紫外線全部見えちゃうらしい」

「ええ！？」

「目には光を受け取る細胞、視細胞があつてね僕の視細胞は通常の数百倍この暗闇でも昼間のように明るく見えるだ」

「それだけじゃねえココの目は普通の人間には見えない電磁波まで捉える」

「ああまあね僕の占いはその人から出る電磁波の色や形、量を見てその人の将来を占うんだ」

「じゃあ僕の未来も見てください！」

小松は後ろ向きで歩き出す

「一流の料理人になれますよね！？どうですかココさん！？」

「（光が更に微弱に？）（待て！止まれ！）」

その時には遅く小松君は崖になっ
ている部分から落ちそうになっ
たがトリコが間一髪手を掴み落ちずに済んだ

「なにしてんだよ？」

「すみません……」

カサカサ……

「何か音がするんですけど……」

小松君が下を見ると俺も大嫌いなサソリゴキブリがうじゃうじゃ出
てきた

サソリゴキブリ さそりごきぶり

猛毒を持つ凶暴な巨大ゴキブリ

背中に特徴的な模様がある

巣に落ちてきた獲物を集団で襲い、瞬く間に食いつくし、骨だけに
してしまう

生息地：暗くてジメジメした洞窟

体長：2.5メートル〜3メートル

体高：1.5メートル

体重：250kg〜280kg

価格：食用としての価値はゼロ。ただし一部のゲテモノ好きの間で
は高額で取引される

猛毒を持つ巨大なゴキブリ

見た目のグロテスクさに加え、繁殖能力が高く、群れで行動するた
め、集団だとさらにキモさが倍増

I G O が毎年公表する「捕獲したくない生物ランキング」では「危険だからイヤ!」というよりは「キモいからイヤ!」
という理由で常に上位にランクインするぐらいの嫌われっぷりである

捕獲レベル：7

分類：昆虫獣類

この後はココが先に降り毒を使いゴキブリを追い返しココが自分の事を詳しく話し穴を降りた
そして何かが接近するのを感じた
そしたら向こうからアゲハコウモリの群れが来た

「アゲハコウモリの群れだ!」

アゲハコウモリ

アゲハ蝶のような模様の羽をもつコウモリ
暗闇の中を無音で飛ぶ為、洞窟内で襲われると厄介な存在
生食可能?

生息地：暗くて静かな場所

体長：70cm

体高：-

体重：1kg

価格：1匹/1万5千円

アゲハ蝶のような模様の羽を持つコウモリ

集団で群れをなして行動し、臆病な性格のため、食べ物を捕獲する
以外には滅多に外部の生物には危害を加えない

食用としては身の部分よりも、羽に付着しているリンブンが香辛料

として使用され

そのスパイシーな味のリンプンは「アゲハコウモリスパイス」として、数多くの料理人たちの必需品として活躍している

捕獲レベル：2

分類：哺乳獣類

「僕がやる小松君下がって」

「あつは、はい」

ココは右手を出し毒を染み出させる

それをアゲハコウモリに向かって飛ばす

「ポイズンドレッシング！」

ポイズンドレッシング

指先から滴らせた毒液を、手首のスナップで飛ばし、広範囲の相手に攻撃を浴びせる技

毒を浴びアゲハコウモリは墜ちていく

「毒は抑えた直ぐに飛べるようになる」

「臆病で滅多に襲う事のない奴らがどうして？」

「ああ襲うというより何かから逃げていく感じ・・・ハツ小松君は！？」

周りを確認するが小松君は居ない

「小松！？小松！！」

「小松君！！」

うねうね・・・

「！！！！」

この感覚・・・

「ココ！トリコ！何か来るぞ！！」

「え！？」

「ギオゝアゝアゝオゝギャアゝアゝ！！！！」

俺達の目の前に現れたのはデビル大蛇だった

「ち！面倒なのに会っちゃったぜ！」

「龍！トリコ！奴の相手は僕がする、その間に小松君を！」

「ココ！コイツ相手にさすが一人じゃ無理だ俺も残るぜ！龍！小松を頼むぜ！」

「任せろ！！」

俺はデビル大蛇をココとトリコに任せ小松君を探しに行った
デビル大蛇は俺を追おうとするが

「おっと！僕の大親友に手は出させないよ！」

「デメエの相手は俺達だ！」

ココとトリコが抑えてくれた

よっし探すか！！

でも急がないと！！ここは迷路だ早くしないと小松の命が危ない！

くっそ！どこだ！？

探している・・・

ドカ〜ン！！！！！！！！
とんでもない爆音が響く！

「おわあ！耳が！耳があ〜！！！！ってやってる場合じゃないこつちか！！！！」

俺は走り出した

着いた所ではデーモンデビル大蛇が居たくつそ！俺が蘇生するしかないか！

「ほう！今の爆音に動じないとは流石じゃなあ」

つて！あの白リーゼント！まさか！

その老人は肩にノックキングをし巨大化しあつという間にデーモンデビル大蛇をノックキングし

小松君を蘇生した

「もう大丈夫」

「つて！先生！なにやってんすか！？」

俺は次郎に話しかけた

「なんじゃ？おう！龍じゃないか！元気だったか？」

「まあご覧の通りですつてか何やってるんですか？」

「十年に一度のフグ鯨じゃぞ？」

「ああ鰭酒目当てですか」

そんなやり取りをしていると小松君が起きた

「おう起きたか二度の人生噛み締めて生きるといい」

先生を見て小松君は驚く

「ああ〜!!!でかい爺の化け物〜!!!」

と言って逃げ出す

「化け物だと!命の恩人だぞう!?!」

「え?命の?はっそう言えば僕はあの時・・・」

「じゃあ気をつけてなういっく」

先生は去っていく

「あ、あのう!」

「あっそつだ洞窟の砂浜に得体の知れないものが近づいてきたから
フグ鯨を捕まえたら早く帰ったほうがええぞおッじゃな龍」

先生は去っていった

その後小松君は俺に泣き付いてきた

「っていか龍さんあの人、龍さんの知り合いなんですか?」

「ああ俺のノツキングの先生だ」

フグ鯨 実食の時！

先生と別れた後にトリコ達と合流し洞窟を進んだ

「小松、お前は命を助けられた恩を忘れちゃいけない。何時か爺さんを最高の料理で迎えてやんな」

「はい！じゃあトリコさんその時は食材調達お願いしますね！？」

「おい見る！」

トリコは明かりが見えたら走り出した

俺達も追いかけていくとそこは洞窟の中とは思えないほどの明るさだった

所々から水晶が飛び出し美しい光景が広がっていた

「さあ捕獲するぜ！深海の珍味！」

トリコは上着を脱ぎ飛び込んだ

「ああ！待ってくれよ！」

俺もあわててノッキングガンを持ち飛び込んだ

しかも驚いた

とんでもなく水が澄んでいる

これが本当に海か？

真水並みに澄んでいる

あ！トリコが指でノッキングした！

俺も行くぜ！

「消命・・・」

気配を消してフグ鯨に近づきエラから頭部の中心へ、斜め45度の角度で

「ノッキング・・・」

ノッキングガンの先端がフグ鯨の中に入りフグ鯨を麻痺させるよし！師匠のお土産用と優奈のにもね

「あれ？龍さんは？」

「まだ上がってないのかい？」

「ぷはあ！」

「お！上がってきたな！そっちはどうだった？」

「なんとか7匹だ」

「7匹か！俺達の勝ちだな」

「いつの間に勝負になってたんだ？」

俺は水から上がり4匹を残し3匹を捌く

小松君も捌き始め失敗続きだったが最後の1匹で成功

「おい！龍！見ろよ！小松の奴やったぜ！」

トリコがこちらを見る

俺はなんとか3匹捌くことができた

「ぬお！3匹捌いたのかよ！？」

「ああ1人1匹ずつな」

「本当ですかあ！！？」

「ああ今回小松君ががんばったからね」

「有難う御座います！」

「それにしても・・・3匹捌いちゃうなんて・・・」
「まあ・・・疲れがなかったからかな？」

そしてフグ鯨を刺身にした

「この全て食材に感謝をこめて！」

「・・・いただきます！」

「では早速刺身を！」

トリコはいつきに箸で刺身を取る

「お〜!!！」

「ああ〜！ちよつと取りすぎですよ！」

「まあ僕達も食べよう」

俺達もフグ鯨を口に入れる

「甘い！なんて脂の旨みだ！最高級のミミック鯨の霜降り肉とマグロの大トロが合わさったみて〜だ！

うめえ〜！噛んでも？んでも味が出続ける！噛み過ぎて顎がいてえ〜でもやめらんね〜」

ゴクツ

飲み込んだ瞬間身体の疲れが吹っ飛んだ

「おお！疲れが一気に吹っ飛んだ！滋養強壮の効果があるとは聞かざりゃ〜！」

「トリコさ〜ん！鱈酒できました〜！」

「ああ〜！」

ズズッ

「うめえ〜なんて美味しい鱈酒だ・・・香ばしさが全身を突き抜ける・・・」

辛口の熱爛で旨みが増して全身の細胞に染み渡る・・・」

「ココどうだった？」

「久しく忘れていたよこの感動・・・美食屋か・・・また初めてみるかな」

「『『『ご馳走様でした』『』『』」

「さあてかえろうか？」

バチャン

水音立てて現れたのは黒い毛をしアリクイに似た頭部をした人型の物体

スタージユンのG Tロボだ

ココは致死性の超猛毒をだし

トリコモ戦闘態勢

「・・・目的は達つたるさっさと帰れ・・・」

俺は低い声で言う

G Tロボは頭をかきフグ鯨の網を持って帰っていった

「龍・・・あれはいつたい・・・」

「・・・おそらくG Tロボだろうそれより早くここを出よう」

「ああ」

俺たちは荷物をまとめ洞窟を出た

俺は師匠のもとに出向き今回の事を話し第1ビオトープに向かった

トリコの怒り

俺は今トリコと小松君と一緒にへりに乗り第1ピオトープに向かっている

トリコと俺はハンバーガーを作っている

「デビル大蛇のハンバーグにネオトマト、ミネラルチーズを挟んだ名づけてトリコバーガー！」

「そのトリコバーガーの照り焼き版名づけて照り焼きトリコバーガー！」

「でかすぎですよ！っていうかそのまんま！」

「この世の全ての食材に感謝をこめていただきまあ〜すう！」

ゴキイ

「顎を外して食べた！！！」

「うん癖はあるが弾力はあるこの肉の歯ごたえ清々しいネオトマトの風味

まるやかなミネラルチーズが心地いい味の三重奏を奏でてやがる」

「甘みを帯びしつとりとまるやかになったこの肉この照り焼きソースのかかったトマトやチーズも更に味が深く濃厚になっている」

ゴックン

「うめ〜！！！」

「そういえばフグ鯨いかがでしたか？」

ヨハネスが聞く

「インパクトはあったが見送りだな海にはまだ食った事ねえ〜食材がおおい

フルコースの魚料理はそう簡単に決まりそうにね〜よ」

「なるほどしかし今回IGO捕獲を依頼した生物は」

「リーガルマンモス その体内のどこかには上質な肩肉 ヒレ肉
モツ サーロイン

それらの全ての美味さを持つ肉 ジュエルミートがあるという」

リーガルマンモス

第1ビオトープ、リーガル島のリーガル高原に棲息する、6本の足、

2本の鼻と牙、一对の羽をもつ、虎毛模様の超巨大マンモス

捕獲アベレージ27という猛獣達が住まうリーガル島の生態系の頂
点に君臨し、高原を悠然と闊歩する

その驚異的な肺活量を以って、周囲にいる猛獣達を鼻から吸い込み、
そのまま咀嚼して

骨のみを再び鼻から吐き出す食事風景は圧倒的。

リーガルマンモスにのみ存在する特殊な部位“ジュエルミート宝石の肉”により、

「古代の食宝」と呼ばれている

正確な技術をもってすれば体内の宝石の肉を取り出されてもマンモ
スが死ぬことはなく

マンモスが生きている限り、宝石の肉は再生するという

成長して巨大になるにつれ捕獲レベルが高くなる。

鳴き声は「バオオオオオ」

>引用<

「古代の食宝」と呼ばれる巨大なマンモス

成長が早く、産まれてから数週間で体長50メートルにもなる

(産まれた時は約10メートル)

繁殖力は強くないが、その分長寿で、500年以上生き続け、その
間も成長は止まらない

「鼻」

左の鼻で吸い、右の鼻で吐き出す。主に栄養分のみを吸収するため骨などを溶かす程の強い消化能力はない
鼻は全て硬い筋肉で、食べると牛やブタの舌のような食感がある

「肉」

ほとんどの旨みを“ジュエルミート 宝石の肉”に取られてはいるが、それでも十分に旨い

「羽」

大昔は空を飛んだというウワサもあるが、今ではほぼ必要のないものである。味は鳥皮に近く、けっこう美味

「胃」

全部で12個ある胃でほとんどの物を消化
体内は広いいため、空気も通っている。生物も棲んでいて、独自の生態系も確立しているとか

宝石の肉ジュエルミート

個体により場所が違いため見つけ出すのは至難。小売で1000g500万円。

トリコ達が体内に入ったマンモスは捕獲レベル：48
年齢は約400歳

リーガル（地名）+マンモス

捕獲レベル：NO

分類：哺乳獣類

俺達に乗ったへりは第1ビオトープに到着し地下に向かうエレベーターに乗った

「所長さんってどんな人なんですか？」

「唯の酒飲み親父だ、まあ会長、副会長についてナンバー3と言われてるみたいだけどな」

「ナ、ナンバー3って緊張しますね・・・」

「緊張感を持つと何が襲ってくるか解らないからな」

そしてエレベーターの扉が開き様々な猛獣が見えてきた

「これって・・・？」

「絶滅種のクローンや動物同士の混合種チエインアニマルだ、束縛された動物

グルメ研究と言う大儀をかざしているが倫理的な観点からトップシークレットの場所」

「・・・」

「龍・・・大丈夫か？」

「ああ・・・やっぱり胸糞悪いぜ・・・命を弄ぶみたいで・・・」

俺は無意識に殺気を出していた

それに寢床から出ていたマッスルクラブも戻っていた

「おーう！久しいなトリコ！龍！」

奥から現れたのは酒を片手に持った男だ

「もう飲んでるか？マンサム所長？」

「今ハンサムって言った？」

「言ってるよ！」

「この人が所長さんですか！？ッてお酒クサ！」

俺達はグルメコロシウムに入り席に座った

猛獣達が次々に入ってきてついにバトルウルフが来た

・・・久しぶりに見たな・・・バトルウルフ・・・

あいつ元気かな？

そんな考えに浸っているとトリコが乱入し5連釘パンチで

特殊超硬化アクリル板を破壊し新たなバトルウルフ誕生の記念の花
火とした

そしてバトルウルフがデーモンデビル大蛇を倒した

だがバトルウルフをG Tロボがビームで打ち抜いた

俺はすぐさまG Tロボに近づいた

「おい・・・」

「アン？オマエハ！ジャリュウハオウ！リュウト！」

蛇龍霸王というのは俺の二つ名だ

蛇はジャコウから

龍は俺の名前からだ

霸王は何故か付いた

「・・・殺す必要があったのか・・・ベイ・・・」

「アン？マズソウダカラコロシタダケダ」

「・・・」

右手にリボンピング・バンカーを展開する

「つるらぁ！！！！」

G Tロボの腹にぶち込む

「ゴボオ！」

G Tロボをコロシムの方に吹き飛ばす

「龍！！こいつは俺が駆除する！！！！！！」

トリコの周りには殺気にも似たオーラが出ている

「まかせるぜ」

この後いきなり5連釘パンチを放ちG Tロボを粉々に粉砕した
俺との修行もあってトリコは原作よりパワーアップしているようだ
な

サニー登場

俺達はコロシアムの一件のあとマンサム所長のフルコースをご馳走になったはいいが

リーガルマンモスの事をすっかり忘れていたがサニーが捕獲完了したという事だ

今は外で待っている
がぶりゆ

トリコは酒乱牛にかぶり付いた

「うめえ〜！酒乱牛！肉汁とテキーラの味が口いっぱい広がって味に酔うとはまさにこのことだ」

「わしにも食わせろお！」

「渡すか酔っ払いめ！」

「外まで食事持ってこなくて・・・あっそつだトリコさん龍さんはどうしたんですか？」

「龍はなんかを呼んでくるって言ってたぞ」

「何かを？」

「あ！お兄ちゃん着たし！」

「「「え!?!?」「」」」

リングが向く方向を向くと巨大な物が見えた

6本の足、2本の鼻と牙、一对の羽、虎毛模様
それを片手で支えている一人の男

1歩1歩踏み出すたびに地面は凹んでいる

リーガルマンモスの体重が伺える

「で、でか！あれがリーガルマンモス!?!」

「古代から食の宝 食宝と言われてきただけの事はあるな、圧倒的

なサイズだな」

「にしても・・・あのサイズは・・・」

すると近くの岩場から何か出てきた

「ギャングフットの群れだし！」

ギャングフット

凶暴で食欲旺盛なことで知られる猛獣で群れを作って行動する

時には、他者が捕えた獲物を横取りしようとする事も

頭部から尻尾にかけてタテガミが生え、あごひげを生やし、2足歩
行する

鳴き声は「ハルルル」「ブルアアア」

生息地：リーガル島第1ビオトープ

体長：4メートル

体高：3.5メートル

体重：1.5トン

価格：食用としての価値は0

「リーガル島のギャング集団」の異名を持つ凶暴で食欲旺盛な爬虫
獣類

群れで行動し、他の動物が狩った獲物を横取りして食べる。一匹一
匹の捕獲レベルもさることながら

群れでの特性を活かした狡猾な集団攻撃はタチが悪く、手ごわい猛
獣である

捕獲レベル：15

分類：爬虫獣類

ギャングフットはリーガルマンモスを奪おうと襲い掛かるが

「ウゴオ!?!」

「バア!?!」

ドサササ・・・

ギャングフットはノッキングされたように倒れ眠りはじめた

「ノッキング!?!」

サニーは近くまで来たならリーガルマンモスを此方にパスしてきた

「「「「ええ!?!?うわあ〜!?!!」「」「」

トリコ達は避難 マンサムはリーガルマンモスを受け止める

「あっごめちよつと重かった?でもナイスキャッチ所長!でも美^くさが足りないけど」

「「「「え?」「」

「受け止める所作に胸がドキユ〜ンってしないし全く感動が起きないって言うか

そもそも顔も不細工色気もないしもう消えろって感じかなあ、全く龍だったらめっちゃ美しくできるのに・・・」

「なananだこの人〜!?!?!?」

「コラア〜!サニー!!大切な食宝をぶん投げるなあ!!」

「マジで美しくねえ」

サニーは超能力を使っているかのようにふわりと浮き上がりトリコ達の近くに来た

「やあ久しぶりだなトリコ以前より細胞が活性化している肌の弾力

性も高いいいもの食べてる証拠だな」

「いきなり肌触りまくるんじゃあね〜よキモチワリイ」

「リン・・・お前！何だその土管みたいな足は！久しぶりに会ったら皮下脂肪もハンパねえ！

そんな甘いもんばっか食べてるからだ！」

サニーとリンが喧嘩を始めようとしたタイミングで

「ギオゝアゝアゝオゝギャアゝアゝ！！！！！！！！」

「くくく！！！！！！！！！！」

トリコ達が雄たけびが聞こえた方向を見たら

通常よりでかいデーモンデビル大蛇がこちらに向かっていて

「でえ〜！！！！！！」

「おいおいリーガル島にはデビル大蛇もデーモンデビル大蛇もいないはずだろう？」

「お〜いトリコわりい遅くなった」

「龍さん！？」

「ん？どうした小松君？」

「嫌だつて何でデーモンデビル大蛇の頭の上に乗ってるんですか！？」

俺はジャコウの頭の上に乗っている

「あれ？前言わなかったっけ？こいつは俺の相棒ジャコウだ」

「あ！ココさんの時にデーモンデビル大蛇が相棒だつて言ってましたね」

「ギョル」

「久しぶりだな龍」

「おうサニー久しぶり」

「にして・・・ジャコウ・・・おま相変わらず肌がつるつるだな
普通のデーモンデビル大蛇はキモイがジャコウお前は美しい」
「ギョル」

ジャコウはサニーに何かを渡す

「お！これキューティクルベリーじゃん！サンキュ！ジャコウ」
「あのお〜トリコさん龍さんって四天王の皆さんと親しいですか？」
「ああ龍は四天王になる前に一緒に修行もしたしな、得にサニーと
ココは龍を慕ってる」

炸裂！フライ返し！

俺達はリーガルマンモスの生息地である

リーガル高原に向かっている

ジャコウはテリーと早速仲良くなったようです

なんか通じる部分があるのかなあ？

俺達は黒草の草原ブラックカーペットに到着した

「おお！黒草の草原ブラックカーペットじゃね〜か！」

「サラダにしたら最高だろ〜なあ〜」

黒草くろくさ

様々な草食獣が好んで食べる草で、その草原は「ブラックカーペット」と呼ばれる

シャクシャクとした歯ごたえで、サラダとしても人気が高い食材

そのまま食べても美味しいがココアマヨネーズをつけて食べると絶品

生息地：温暖で栄養豊富な大地

体長：約30cm

体高：-

体重：-

価格：50本1束 / 1200円

イラクサ科の多年草

その色味からは苦そうないメージだが、味そのものは、フレッシュな口あたり

食感はニラや青ネギに似たシャキシャキとした歯ごたえ

また、群生する黒草はブラックカーペットと呼ばれ、周辺に生息す

る草食動物たちの貴重な栄養源となる

捕獲レベル：1以下

分類：植物

ジャコウは早速好物である黒草を食べ始める

トリコモリンが見つけたココマヨの樹でココアマヨネーズを
黒草にかけ食べる

ココアマヨネーズ

ココマヨの樹からとれるマヨネーズ暗くて静かな場所
黒草につけて食べると絶品

生息地：温暖で栄養豊富な大地

体長：-

体高：-

体重：-

価格：スーパーなどで1本500g/2500円

ココマヨの樹はウルシ科の落葉高木

その熟した実には、脂分が豊富に蓄えられており

ココアの苦みとマヨネーズの酸味が混ざったような味のココアマヨ
ネーズが入っている

生野菜などのサツパリした食材のドレッシングとしてはもとより、
その癖になる味わいから

「ココマヨラー」まるココマヨ好きも多いとか

捕獲レベル：1以下

分類：天然食品

するとテリーが吠え始めた

「テリー？」

「！トリコ」

サニーが向いている方向を見ると

全身を硬い岩で覆われたかのような、巨大なヒト型の猛獣が近寄ってきた

「なんなんですか！あれえ〜！？」

「ロツクドラム」

ロツクドラム

全身を硬い岩で覆われたかのような、巨大なヒト型の猛獣

本来の生息地は海岸近くだが、その旺盛な食欲を満たす為、より大量のエサを求めて内陸部にも進出した

強固な甲殻からに覆われており、その肉は珍味とされているが……

サニーによると皮膚には独特の弾力があるものの、ほとんどが脂肪だという

その甲殻は、超硬タンパク質の表皮に美炭酸カルシウムが付着してできており、完美大理石の原料となる

鳴き声は「ヴロロ」「ゴアアア」「ヴォオオ」「ゴロロロ」

生息地：岩場の多い海岸から山まで幅広く生息

体長：-

体高：35メートル

体重：50トン

価格：肉は1kg/2万円 殻の岩は100kg/600万円前後
で取引される

もともと海岸近くに生息していたが、あまりの大食漢故に大量の食料を求めて陸地の奥に進出した好戦的な巨大甲殻獣類

食用としても用いられるが、全身を覆う硬い甲殻は超硬タンパク質の表皮に美炭酸カルシウムが付着した素材で

加工すると世界一硬くて美しい大理石と言われる「完美大理石」の原料となる

そのため肉よりも甲殻の方が何倍も高値で取引されている

その高額の甲殻を求めてロックドラムの捕獲に挑む美食屋たちは後を絶たないが

そのほとんどがロックドラムのパワーの前に返り討ちにあっているらしい。

捕獲レベル：27

分類：巨大甲殻獣類

「小松お前は下がってる籠、小松を頼む、サニー援護してくれ」

「ヤダ」

「っておい!!!」

思わず突っ込むトリコ

「めんどくせえ」

「面倒ってそんな事言ってる場合じゃないし」

「所詮食つたためなら手段を選ばん生物生き方に美しさせいぶつぜんぜんなくね？

見た目もあれだし相手する要素0」

「だが肉は珍味倒す価値100だろ!？」

「栄養豊富な？ないなら価値ゼロオ」

「なら間を取って50だ！そうだ！龍！ジャコウは！？」

「そうだな相手でかいしジャコウ頼めるか？」

ジャコウは一心不乱に黒草を食べている

「・・・わりい食う事に夢中になってる・・・」

「トリコさん！きてますう！！」

小松君の声でロックドラムの攻撃に気付き後ろに飛びのく

「うおおお！！5連！釘パンチイ！！」

ロックドラムの左手に釘パンチが炸裂し手に大きな穴を開け

ロックドラムは倒れる

「くっ・・・コロシウムでの無理が響いてるぜこれ以上の連射はきついで

左手じゃGTロボとの戦いでつかねえしサニーが動いてくれれば・・・」

トリコの間を付きロックドラムは踏み潰そうとするがテリーが素早く反応し

ロックドラムに攻撃を加えて倒す

それを見てテリーに笑顔を向けて喜ぶトリコ

だがテリーに嫉妬しリンが倒れたロックドラムにスーラーリラクデーションを吹き付けようとするが

誤ってバトルフレブランスを掛けてしまい興奮状態にしてしまうリンにひたすら攻撃を食われる

そんな時俺はロックドラムの殻の価値を思い出した

「サニーほら」

「???ん!!!?」

サニーは何かに気付き邪魔だったロックドラムをフライ返しで吹き飛ばす

「こいつは完璧なる美の石！完美大理石の材料になる！」

「妹より石目当て・・・信じられないし・・・」

「ははは・・・」

「素材としては何十円としない Pasta だが

料理人の手にかかり美しい皿に盛り付けられる事により

数千円になるそう皿は食を引き立てる大切なサポーター！

手を加え美しい皿に盛り付けられる事で Pasta の味のランクは上がる！

それは気のせいでもない！いわば合作！美しさとは調和なんだよ！

つまり食材のみを求めるなんてナンセンス！全く持ってえ下劣の極みい！

フン・・・解ったかあ龍以外のお前らあ!?!?」

「って僕達のこと言ってたのお!?!?」

「さあこれもまた巡り合い共に調和しようかロックドラム?」

ロックドラムはパンチをするが

「美しく散るがいい！フライ返し！」

ロックドラムはまるで自分のパンチを喰らったかのように吹き飛ば

「どお?てめえくパンチ食らった気分は?」

フライ返し

カウンター技

あらゆる物理攻撃は、同じ力で返される
ただし触覚で力を流動させ、相手に返す技であるため、触覚の耐久
力を超える力を跳ね返すことはできない

グルメ153時点、サニーの触覚1本あたりの張力は約300?で
あり

1本でその1000倍までの力を受け流すことが可能。つまり1本
で最大300トン

触覚30万本をフルに使っても返せる力は9000万トンが限界値

その後もフライ返し、^{ヘア}髪ネット、^{ヘア}髪ロックを使い
ロックドラムを倒した

「さすがサニー。ってジャコウまだ食ってるのか・・・」

あの戦いの中ずっとジャコウは黒草を食べ続けていた

キャラ紹介

たつがみりゅうと
龍神龍人

性別 男

年齢 転生前 18歳 転生後 18歳 グルメ界での修行終了時
了時 25歳

身長 転生前 185cm グルメ界での修行終了時 218cm
(グルメ界の食材が栄養が豊富だったため)

体重 転生前 69kg グルメ界での修行終了時 98kg 四
天王の三人より軽い

容姿 上の上 性格が優しいためとてもモテた

だが男子生徒からは嫉妬の目で見られていた
服装は黒い長ズボン、腕や脇腹の部分に赤と黒の龍が描かれ
ている服を愛用している

前世では犯人追跡中のパトカーに轢かれ死亡
神の手によってトリコの世界に転生する

美食屋でもありIGO会長一龍の弟子

二つ名は蛇龍霸王

蛇は相棒であるデーモンデビル大蛇のジャコウから

龍は龍人の名前から

霸王は何故か付いた

四天王であるトリコ、ココ、サニー、ゼブラとは友人関係
ゼブラとは喧嘩仲間であり親友

ココに占いを進めた人物でもある、ココとは大親友
サニーとは美しさを語り合う親友

トリコとは頻繁に狩に出たり食い比べをしたりする大親友
武器はスパロボのソウルゲインの腕

二代目研ぎ師メルクに作ってもらった日本刀と斬艦刀

龍人は二刀流であるが斬艦刀は滅多に使用しない

主に二代目メルクに作ってもらった刀『黒刀 覇鎧龍』を使用して
いる

黒刀 覇鎧龍には竜王デロウスの牙の一部が使われている

因みに二代目メルクに一方的に好意を寄せられている

ノッキングマスター次郎の下でノッキング技術を学び

ノッキングができないユニコーンケルベロスのノッキングに成功す
るなど

規格外すぎる人物

たつがみ ゆうな
龍神優奈

性別 女

年齢 転生前 11歳 転生後 13歳 グルメ界での修

行終了時 18歳 現在 20歳

身長 転生前 149cm グルメ界での修行終了時 194cm

(グルメ界の食材が栄養が豊富だったため)

体重 転生前 32kg グルメ界での修行終了時 78kg

容姿 リリカルなのはのフェイト

兄である龍人が死に絶望している中、神に出会い自らもトリコの世

界に向かう

自らも能力を貰いグルメ界で5年間修行し人間界に戻り美食屋になり龍人の情報を集める

2年後にグルメフォーチュンの近くの草原に寝そべっている龍人と再会する

重度のブラコンであり兄である龍人に恋心を抱く

トリコの世界には自分達を兄弟と証明する証拠がないため結婚しても問題ないと考えている

二つ名は女神ヴァーナス

華麗に美しく戦う事からつけられた

武器は愛用しているリボンと小型のノッキングライフル

中、遠戦闘を得意とする

美食屋と言っても調理の腕は凄まじく一龍も認める腕前を誇る

大人しくて少し茶目っ気があるが嘘をつかれるのが嫌い

そのためかゼブラと仲がいい

サニーには美容のいろはを教えてもらったり

ココにはよく占ってもらっている

トリコとは龍人と共に狩に行く

現在は癒しの国ライフで自分の身体に磨きをかけている真っ最中

ロックドラムに飛ばされて

さて俺は愛刀である『黒刀 覇鎧龍』を使いロックドラムの甲殻を剥いでいる

ただどこいつは軽く振るだけで山どころか海まで割るから優しくやらなければならぬ

スツ・・・ポロ

甲殻がきれいに取れた

「ふう・・・こんなでいいか？サニー？」

「サンキュ龍」

「おいサニー本当に肉いらね〜のか？」

「そんな栄養なさそうな肉いらね」

「まあサニーらしいな」ドスンドスンドスン！！」「ん？」

大きな音がしたのでそちらを見るとロックドラムが此方に向かって来ていた

「え〜！？ロ、ロックドラム！？」

「サニーが初っ端に吹っ飛ばしたの戻ってきやがった！」

「あああれか」

「あ！バトフレ浴びせた奴！？ツてかぜんぜん元気だし！」

「ノッキングすんの忘れてた」

「」「ええっ！？」「」

「はははは！！！」

俺達はロックドラムに蹴られて別々の方向にふっ飛ばされた

俺と小松君とサニーとジャコウ

トリコとリン

つてかよくジャコウふっ飛ばしたな

「わああああ!!!??」

え、俺達は簡単に言つと落下中です

今のは小松君の声です

う、ん後数十メートルですな

「髪ネット!!」

サニーが受け止めてくれました

「わりいなサニー」

「細か事気にすんなつてかロツクドラムさすが捕獲レベル27

甘く見ていたまさかマツシユルムウッドまで飛ばされるとは」

「ああまさか油断してたはいえジャコウを吹っ飛ばすとは」

「うわあ、クリーム松茸だ!」

「「つてか復活早!」」

クリーム松茸

リーガル島のマツシユルムウッドに生える天然のクリーム松茸は、甘みが全然違う

軽く割いてから焼くと独特の香りがしてクセになる味わい

薄くスライスして刺身で食べるとクセがなく、いくらでも食べられる
コリコリ、ポリポリと歯ごたえのあるキノコ

>引用<

生息地：多湿な場所（リーガル島・第1ビオトープ「マツシユルムウッド」など）

体長：25cm

体高：-

重さ：1本/700g

価格：1本/8万5千円

松茸独特の香りに加えて、ミルクを思わせるようなクリーミーな味
わいの担子菌類キジメジ科のキノコ

そのまま食べても甘みがあつて美味しいが、軽く焼いて醤油などを
かけて食べても香ばしさが増して味わい深い

「いや〜天然物のクリーム松茸なんて初めて見ましたよ！
サニーさん！龍さん！はっ！これは！」

小松君はなにやら草むらに手を突っ込むとタコが出てきた

「うわぁ！キモ！」
「ギョルルルル！！！！！！」

サニーとジャコウは思わず引く

「酢ダコですよ樹海を渡り歩く調味料ダコ、オクパソースの一種ビ
ネダーソース出す酢だこ！」

「美しさマイナス100、キモさ5万！！！」
「はっ！」

小松君は更にタコを見つけ両手、頭、肩に乗せてる

「おっう！！！」

「ギョルルルルルルルルル！！！！！！！！！！！」

「ウスターソース出すウスタコにサルサソース出すサルスタコ！
クリーム松茸に合いそうな醤油ダコもいますよ！」

「な、なんでよりもよってこいつもいるんだ・・・」

因みジャコウがオクパソースから逃げているのは

以前にこいつを食べて腹を壊したからである

それからジャコウはタコが大の苦手になってしまったのだ

GTロボVS蛇龍霸王

俺は今怒りを感じている

セドルが行った残虐な猛獣殺し

俺はトリコと同じで基本的には食うため以外では殺さない

セドルの行ったことは許せない

だがあいつの事はサニーに任せよう

さて今はリーガルウォールを登ってます

サニーの能力って本当便利だね

俺も触覚使って上ってます

まあ俺の場合髪はそんなに長くないんで10万本なんだけどね
因みジャコウは下で待ってます

「ん？」

「どした？龍？」

「お出ませだけ リーガルウォールの主 ヘビークリフ」

ヘビークリフ

リーガルウォールの主

断崖絶壁に横穴を掘って棲みついている

何もしなければ襲ってこないが、怒らせると非常に厄介な相手

捕獲レベル：30

分類：哺乳獣類

「小松君静かにね」

「ハ、ハイイイ」

だがいきなり空が暗くなってきた

「そ、空が暗くなってきましたね・・・雨雲でしょうか・・・？」

「いや・・・これは・・・！」

「な！」

「なんじゃ〜こりゃ〜!!??？」

落ちてきたのは三ーが捕獲した子マンモスより更に巨大なマンモス

「親マンモスだあ!!！」

「サニーさん!子マンモスの時みたいに持ち上げてください！」

「できるか!つてか無理だ!龍!如何にか出来ないか!？」

「幾らなんで足場が不安定すぎる!こんなでどうにかし様なんて無理だ!」

そんな中へピークリフが出てきた

「あれ？」

「なんか怒ってね?こいつら？」

「ええ〜!?怒らせたらヤバイじゃないですか!？」

「なあサニーこいつらこの騒ぎ俺達のせいだと思ってね？」

野生のヘビークリフが襲い掛かってきた!

「思ってる展開じゃね〜かこれ!!！」

「やばい!ここはいったん回避するぞ!!！」

俺たちは触覚を使って逃げる

「逃げましようサニーさん!龍さん!ぬほほ〜に〜げ〜て〜!!！」

「逃げる？フライ返し！！」

襲い掛かってきたヘビークリフをフライ返しで返り討ちにする

「逃げるなんてブサイクな事はしねえ〜ね一旦引くだけさ」

でもまだまだヘビークリフいっぱい

「かも〜す！！MAXで引くけどなああ！！！！くおおおおお！！！！！！！！！！」

崖を全力疾走！！！！

だけどトリコがナイフで穴を作った

「よおし！行くぞ小松まつ！龍！」

「OKってかはやくいくぞおおお！！！！」

触覚で崖をはじき穴へと飛び込み

「髪ネット！！！！！！」

ネットを張りなんとか穴を潰されずにすんだ

「ふう〜って！ヘビークリフ来たあ！！」

そしてココが救援に来てくれ何とか助かった

「ココサンキュ」

「礼ならいいよっていうかなんで体内に行かなかったの？」

「あん？巨大G.T.ロボが2機いんの俺が居ないでどうする気だよ

「？」

トリコ達は既にマンモスの中に向かった
それに原作とは違い巨大型が2体居やがる
ピンクに赤

「俺は赤を相手する・・・ジャコウオオ!!」

「ギオッアッアッオッギャアッアッ!!!」

ジャコウがGTロボの足に巻きつき思いつきり投げ飛ばす

「ココ・・・ここから離れて戦うほうが良いだろ？」

「ああすまない」

「行くぞ・・・霸王の・・・処刑の時間だ・・・」

大きく投げ飛ばされたGTロボのもとに向かう

「ウウ・・・ヤッパリイマノハジャリユウハオウノアイボウ

デーモンデビルオロチノシワザカ・・・」

「・・・対大型猛獣用の巨大型・・・霸王の・・・餌食にしてやる
よ・・・」

俺は霸鎧龍を引き抜き刃の部位に付いていた血を舐める

「・・・ハオウツトイウヨリ・・・チヲホツスルシニガミダナ・・・

」

「死神か・・・それもまた・・・霸王の顔・・・」

「ピーラーショット!!」

GTロボの体毛に使われている強化アラミド繊維を高速で飛ばし攻

撃してくる

「・・・コーファルス・・・」

左腕で全てのピーラーショットを弾く

「！ステデピーラーショットヲ!?」

「・・・霸鎧龍・・・斬撃・・・」

斬撃を飛ばしGTRロボを十字に切りつける

「・・・キシパルス・・・」

「グオオ！」

「・・・装甲を抉っただけか・・・さすがに力をセーブしすぎたか・・・」

「アアン!!ナメテンノカ!セーブシタダト!?!」

「力を出すとこの島を割っちゃうからな」

「ウウ・・・ミキサーパンチ!!」

右腕が高速で回り殴ってくる

「こつやるんだよ・・・玄武剛弾!」

腕を高速回転させそのまま飛ばす

ミキサーと玄武剛弾がぶつかり合い大気が揺れる

「又オオオオ!!!バカナ!ジンタイデミキサーイジヨウノコウソ

クカイテンスルダトオ!!!」

「もう一撃!青龍鱗!」

手にエネルギーをため青龍鱗を放ち腹に直撃させる
それで体制を崩し玄武剛弾が顔に決まる

「チィィ!!!」

「・・・どうだ？霸王の攻撃の味は？」

「コンガキガアアアア!!!!!!」

ダッシュで近づいてくる

「1 / 2 / 3 / 4 / 5 / 6 / 7 / 8 / 9 / 10・・・」

左腕に力を溜める

「てめえを原始レベルまで粉々にしてやるよ・・・
10連釘パンチィィ!!!!!!」

釘パンチを腹に命中させ10回の衝撃が波状的なダメージが襲い
ボディを粉々にしココの目を上回る俺の目でも目視不可能なまでに
粉碎した

因みに俺の上限は80連までだ
滅多に使わんがな

「・・・ココの所に行って飯分けて貰おう」

俺はココの居る地点に向けて歩き出した

ジュエルミート実食！

現在俺はココとサニーと一緒にキツスが持つてきてくれた
水や食料を食べています

俺も行くかと思っただんですけどサニーに美しくないって言われて止
められました

そしてマンモスが再び身体を起こし大声を上げる

「バオオオオオ！！！」

「おお毒がついに切れた」

「トリコ達はどうなってる！リンは！？小松は！？」

「信じる事が美しいだろ？」

「そうだぜサニー本当お前は美しい奴だよ」

「バオオオオ！！！」

マンモスは口から何かを吐き出した

「サニー！クッション頼む！」

「おおトリコ！小松君！リンちゃん！」

「あれが・・・」

「ジュエルミート！！！」

トリコが右手で持っているのは赤くまるで職人が作り上げたような
美しい模様此処からでもおいがする

「うっひょ〜！！！！最高に優しくキャッチしてやる！髪ネット！！！」

キャッチしたは良いがトリコは地面に落ちた

「すげえ・・・これがジユエルミート・・・」
「おまえなあ！優しくキャッチするって肉の事かよ!?」
「ん？たりめえだろ」
「ははは・・・」

この後小松君の言葉でリンちゃんに髪オペレーションで治療するとキッスが子マンモスを誘導して連れてきてくれた

「ありがとう古代の食宝よリーガルマンモス・・・ん？」
「バオオオオ！！！」

トリコが礼を言ったらマンモスが足で踏み潰そうとしてきた

「・・・うわああ！！！！??」「」「」
「まだ怒ってる〜!!」
「ジャコウ！テリーとオブサウルスを運んでくれ！いいよな龍!？」
「オフコース！」
「ギョルルル！」
「サニー！フライ返した！」
「此処は毒だろココ！」
「ははははは！」
「とにかく研究所に帰るぞ！」
「はい！」
「ジユエルミート実食だ〜!!」

俺達は騒ぎながら逃げた

・・・そして鈴ちゃんが目覚めついに実食の時
ウエイターが皿を持ってきて蓋を開けた
そこにはまるで太陽の様に自ら光を放っている

「ジュエルミート盛りで御座います」

「きたあ！」

「これが・・・ジュエルミート・・・」

「わお」

「月の光が霞んで見えるし！」

「あれだけ巨大なマンモスの体内をこいつが照らしてたんだあたり
まえか」

「とにかく食べようぜ！」

「「「「この世の全ての食材に感謝をこめていただきます！」」」」

「はああ・・・ま、眩しい・・・でも白熱灯のように優しい光だ」

小松君はナイフを入れた

「わあ　　肉汁花火が打ち上がった　　！！」

そして口に入れる

「スゴイ・・・見た目はこんなにゴージャスなのに・・・
全く飾り気のない肉本来の旨みが口いっぱい広がる・・・」

もぐ　コリ

「これは！！　心臓ハツのようなコリコリとした歯歯ごたえ。
噛むごとに肉汁がどんどん出てくるけど全然しつこくないぞ」

そして飲み込む

すると全身が光を発した

「ス・・・スゴイ！！ 全身が光り出した！！
まるで、細胞1つ1つが、喜びで輝いているみたい！！
すごいですね！トリコさん！！って超光ってる！！」

「んおつの部位は肝臓だ！ レバ刺しの食感！！
でも、匂いやクセは全くない！ しつとりとクリーミーな味わいだ
！！」

「ん ここはバラ肉の濃厚な味！
お肉と脂の層が何重にも重なって、口の中でほどけるような食感。
最高かも、コレ！！」

「おつ、来たぞサーロインだ
口の中で一瞬で溶けたかなりの脂肪分だが、なめらかで、とても喉
越しがいいな」

「おおこれは肩肉のしつかりとした歯ごたえ！噛み応えがあつて
口いっぱい広がるこのエキス！」
「味と食感！ そして部位の...カーニバルだな、まるで！！」

「こりゃあ・・・決まりだな・・・」
「今何つったトリコ？」
「んおつ！！サニーと龍！凄エ輝きだな お前ら！！」

俺とサニーはとんでもない輝きを放っていた

「なあトリコ・・・今何つったんだよ？」
「なにが？」

「なんか決まりって言ってたな」
「ああこれだけの肉だ・・・入れてもいいかなと思つてよ」
「入れてもいいって何にだ？」

「俺のフルコースの肉料理にさ」
「わあ！！トリコさん！！」
「賛成！！！！」

「ちよ待て〜い！！！！」

サニーが決まる時に寸止めした

「コッコッなっ……!!?!?」「」「」

「何すんだサニー コラあ!!」「」

「何すんだじゃねーだろ トリコはやまっちゃいけねーぜ!!」「」

「はやまってるねーよ 別に!!」「」

「てかオレのこの輝きを見る!!」「」

「ああ……うん……スゲエな……だから?」「」

「ジュエルミートは俺を選んだくさくね!!?!?」「」

「くさくねって……どーゆー意味?」「」

「まさか……お兄ちゃん……」「」

「『宝石の肉』^{ジュエルミート}はオレのメインディッシュに決定する!!」「」

「待てコラッ!!」「」

「何すんだトリコでめえコラあ!!」「」

「うるせえ何でお前のメインになんだよ!!」「」

「オレの方がピカピカしてっからだろが!!」「」

「ピカピカカンケーねーだろ!!」「」

「てかそもそもオレのお陰でジュエルミート捕れたっぼくね?」「」

俺が倒したG Tロボ(ヤツ)強かったっばいしな」「」

「なわけあるか!お前寝ボケてっつと10連くらわすぞ コラ!!」「」

「来いや!はね返してやんよ!!」「」

「ムグムグ」「」

「あ……あの〜お二人のフルコースにそれぞれ入れたらいいんじや……」「」

「「ならぬっ!!」「」

「ど、ど〜して?」「」

「「なんか嫌だし食材かぶるの!!」「」

「何ですかその理由わ」「」

良いじゃないですか別に」「」

「ならん！ここはプライドにかけてオレの肉料理に！！」

「いや！オレのメインだ！！」

「いや」

「いや」

「ウチはトリコのフルコースに賛成だし」

「うっせ〜っぞリン！お前は黙ってる！」

「うっさいのはお兄ちゃんだし」

「食事しようか？龍、小松君」

「だな」

「そうですね」

「ってか少しお土産に貰っていいかな？」

「いいじゃない？」

優奈のフルコース スープ 前編

「うーん おいし〜」

俺は今師匠の別荘でジュエルミートを師匠と優奈に食べてもらってます

快晴の下で海は輝き、海風が心地いいです
最高に美しいシチュエーションだ

「ジュエルミートは美味しいの」

師匠は尋常じゃないくらい光ってます

優奈も俺とサニーに負けず劣らず輝いてます

俺は虹の実ワインをグラスに注ぐ

七色に光るワインは波からの反射で輝きが増している

俺はワインを飲む

「っで師匠なんで俺を呼んだんだ？」

「おうそうじゃったな優奈が自分のフルコースに入れたい食材があるから」

龍ちゃんに付いて来てほしいと言われての」

「それで俺呼んだって訳か・・・」

ワインを注ぐ

師匠は海の上を跳ねて何所かに行った

「何で海を上を跳ねられるんだ？俺も人の事言えんが・・・
で？何を捕りに行くんだ？」

「BBコーン」

BBコーン

その昔、グルメ貴族たちのおやつだったというポップコーン

BBコーンというのは通称で、正式名称は「ブルーブラッドコーン」

BBコーンを調理するためには、極めて強力な火力が必要だが、いきなり高温に熱すると表面が焦げてしまい味が落ちる

まずはゆっくりと中から温め、徐々に温度をあげていくのが調理のコツだが

油断するとすぐに焦げてしまうので目が離せない

最終的には1200度の高温が必要となり、ポップコーンに調理する場合の捕獲レベルは30を超えともいわれている。

調理に成功すると、一気に弾け、たった一粒でもポップコーンの雨を降らせる。

まるで綿あめのような大きさのそれは、揚げたてのコロッケのように香ばしくかおり、食欲をそそる

噛むのを忘れて飲み込んでしまうほど口当たりがよく、うまい

グルメ界の猛獣たちの大好物でもあり、テリーの主食

>引用<

圧倒的な香ばしさとコク

たった1粒を強力な火力で炒り爆発させれば、たちまち100人前のポップコーンに変身する

取引も1粒数10万単位で行われ、1本丸々なら末端相場で10億は下らない、まさにコーンの王様

捕獲レベル：30

「BBコーンか・・・貴族を意味するブルーブラットの頭文字をとり正式名称『BBコーン』だがそれはトリコの前菜だぞ？」
オードブル

「だったらトリコに入れていいか聞いてみるよ」

「そうか・・・BBコーンとなるとウーディングルかグルメ界だな」
「グルメ界だと帰って来るのが面倒だしウーディングルにしようよ」
「だな、でもウール大陸となると遠いな今回ジャコウは連れて行けないな」

ウール大陸に行くとするれば海を渡らなければならない

俺はマツハヘリを持っているがジャコウは連れて行けんな

「ねえ早く行こう！」

優奈は大きい胸を押し付けてくる
ちよいとやめてほしいな

「分かった分かっただから少し離れるキー出せんだろ？」

「い・や」

「だったら俺は行かなくて良いか？」

「それはだめえ！！」

優奈は泣きそうな顔で俺の腕を掴む

「行くから泣くな」

「ハッイ」

「たっく切り替えが早いと言っかなんというか・・・」

俺と優奈はマツハヘリに乗り込みウール大陸に向かった
だが

「おい優奈なんで俺の膝の上に乗る？」

「だっってお兄ちゃんの体温を感じていたいんだもん」

「はあ・・・操縦しにくいんだがな・・・」

でもウール大陸まで遠いな

俺もは普通のマツハヘリより2倍早いけど

それでも半日はかかる

・・・つまり優奈は後半日このままかよ・・・

半日後・・・

着いたはいいが・・・

膝が痺れてる・・・

立てないことはないがな

まあマツハヘリはこのままで良いか

バリアシステム特典でつけたし

「ここがウール大陸かあ」

優奈は周りを見回している

俺は足元に花が咲いている事に気付き屈んだ

「こいつはピースフルフラワーか」

ピースフルフラワー

通常は、世界一平和な島ピースフルアイランドに咲く花

北ウール大陸でも自生が確認された

穏やかな環境を好み、殺気立った生物が近づくと、その花びらを散らせてしまう

花びらは全部で6枚あり、捕獲レベル10程度の実力の持ち主の殺気で1枚の花びらが散る

つまり、ピースフルフラワーの花びらが半分散れば、捕獲レベル5

程度

2枚散ればレベル10程度であり、遭遇した相手の実力をはかる目安となる

「珍しいなこんな所に咲いているとはな
いくつか積んで行くか」

俺は3つほど花をもぎベルトにさした

「さあ行くぞ」

「ハイ」

俺達は南に見える森を目指し歩き始めた

見渡す限りの平原ここでピクニックでもやったら気持ち良いだろうな
まあスリルとデンジャランスMAXだろうがな・・・

「流石に暑いな・・・」

時計の温度計を見ると32度

そりゃ暑いわな

「あ！あれ酒ヤシの実じゃない？」

優奈が見つけた木にはヤシのような実がなっていた

酒ヤシの実

割ると中から甘いお酒が出るヤシ

天然で発酵した酒は、まるで上質なりキュールのようにまるやかで
飲みやすいとか

俺は懐から針を2つ取り出し実のなっている部分に投げ
2つほど実を落とす

トリコのナイフで半分に割り飲む

「うん美味しい」

「これ美味しいだよねえ」

俺達は飲むながら森に向かうが

夜になってしまった

しょうがないでキャンプを張る事にしました

酒ヤシの中身を薪にぶっ掛け指の摩擦で薪に火をつける

俺は白菜と豚シロクマの挽肉の調理を始める

まずは白菜を細かく切り

フライパンに油を引き細かく切った生姜を炒める

そして挽肉を炒め始め赤い部分がなくなったら白菜を入れ

炒めながら混ぜる

白菜から水分が出てきたら新たに水を加え少し煮詰めたら

水に溶かした片栗粉を加えとろみが付いたら出来上がり

「おい出来たぞ」

「こつちも炊けた」

ご飯が炊けたようだ

ご飯を茶碗に盛ってその上からあんかけを掛けて・・・

「この世の全ての食材に感謝をこめていただきます！」

箸で掬い一口・・・

「ん〜まるやかなあんかけがジューシーなピグマを包みに白菜のシヤキシヤキ感！

うめえ〜!!」

「やっぱり簡単だし美味しいね」

「そうだな」

こうして俺達は夕食を堪能しテントで眠りについた

優奈のフルコース スープ 後編

さて朝になり適当に食事を取りウーザンゲルに向かう

余談だが寝てる間に優奈にキスされそうだったが意識の一部が覚醒していたから回避できた

着いた方がいいが・・・不気味だ

まだ朝だと言うのに暗い

「・・・暗いね」

「俺には明るいかな」

「じゃあお兄ちゃんにくっ付いていかないと!」

優奈は腕に抱きついてくる

「はあ・・・何処でこんな子になっちゃったんだろう・・・」

俺は転生する前の生活を後悔していた

森に入り木を登る

BBコーンは森の上に実っている

そのため木を登る必要がある

優奈は俺に抱き着いたままなのでお姫様抱っこをしカベジャンプをしながら登っていく

「あとちよい!」

足に力を入れ一気に木を抜ると

木の葉の上から大小様々のBBコーンが実っていた

そして俺は着地した

そして渋る優奈を降ろす

「にしても・・・こんなに実ってるとはな・・・」

「あのでっかいのなんてどう?」

「あん?でかいの?」

優奈が指差す方を見るとまるでタワーのような巨大なBBコーンが実っていた

「でか!」

「ねえ!はやくいこ!」

優奈は俺の腕を引っ張る

「おい引っ張るな」

引っ張られながら巨大BBコーンに到着
だが皮が剥がれている

「これってトリコがもう来たんじゃないか?」

「みたいね」

俺と優奈はジャンプしBBコーンが見えている部分に到達する

「こいつがBBコーンか・・・香ばしい甘い匂い・・・

普通のトウモロコシなんて比にならないくらいだ・・・」

「でもどうやって収穫したら良いんだろう?」

優奈はBBコーンを引っ張るが取れない

「・・・内側から衝撃を与えないとダメだな」

俺は内側に回り左腕に力をためる

「3連！釘パンチィ！」

3重の衝撃が波状的なダメージをあたえBBコーンをはじき出す
ぽん！ぽん！！ぽんぽん！！！！

銃の弾を撃つ音より強く優しい音と供BBコーンが飛び出た

「やったあああ！！！！！！」

優奈は飛び上がっている

BBコーンを回収するためにBBコーンから降りる
すると

「ありがと〜！おにいちゃん！！！！」

優奈はまた抱きついてくる

「有難うお兄ちゃん！愛してる〜！！」

「解ったから離れる、ホラ帰るぞ」

さっさとBBコーンを回収し折れは歩き始めた

「あ〜んまっつてよ〜いけず〜」

俺達が木から降りると小松君とティナ、ヨハネス、サニーがいた

「あれ？サニー？」

「龍？それに優奈？」

「お久しぶりです」

「龍さん！」

「小松君」

小松は俺の姿を見ると大声を上げる

「誰？」

優奈は小松君と面識がないため頭に？を浮かべる

「あの龍さんは何でウーザーに？」

「ああ優奈のがBBコーン収穫のための付き添いだ」

「優奈？」

「私が優奈です、龍お兄ちゃんの妹です」

「あッご挨拶が遅れました、僕はホテルグルメの料理長をさせてもらってる小松と言います」

「宜しく」

「ッでなんで小松君は此処に？」

「ウールスターソースの実を採りに着たんです」

「ほッって帰らなくて良いの？ってかホテルの厨房使っても良い？」

「あッは、はい！もちろんです！」

「よッしゃ！華麗なフライトで帰るぞ！」

さっさとマツハヘリの起動させサニーのへりを追う
そしてホテル到着

「サニーの奴無茶な着地しやがって」

つといいながら屋上に着地し優奈は厨房でBBコーンを調理する
そして俺は小松君の所に向かう

そこではトリコがポップコーンを持ってきた所だった

「トリコ」

「おお！龍！」

「こいつがBBコーンポップコーンか・・・っていうより綿飴だな
こりゃ」

「龍も食おうぜ！」

「ああ、でもそろそろ・・・」

「お兄ちゃん！できたよぉ〜！でもいっぱい作っちゃった」

優奈がBBコーンポタージュを持ってきた

「おお！優奈！」

「あ！トリコ！ねえフルコースはどう？」

「ああオードブルをBBコーンにしたぜ！」

「ああトリコ悪いが優奈のフルコースにBBコーン入れてもいいか
？」

「スープにこのポタージュを入れたいんだけど・・・」

「なんだそんな事かよ！良いに決まってるじゃね〜か！」

「ありがとう！じゃあこのポタージュもみんなで飲もう！」

「おっしやあ！！！」

俺達は手分けして皆にポップコーンとポタージュを振る舞った
みんなは食べ始める

「ん〜！うめ〜！香ばしいコーンを更に香ばしくしゃがるこのソー
ス！」

ついつい手が伸びちまう！もう加速がついてとまらね〜！！

そしてこのポタージュ！！甘いが全くしつこくない、まったくし
つつ爽やかだ！

このポタージュにポップコーンをつけると更に甘みが増してそして
コクと匂いと風味が

「層増しやがる！やべえ！もう止める事が出来ね〜！！！」

トリコはポタージュを絶賛しながら食いまくっている

「うめえ！なにこれ！？髪が更にキツラキラになっていくんだけど
！？」

サニーの髪が光っている

「あっそうかヘルフォートレスのとき汁入れたからな？」

「あっやっぱ淹れたのか？」

「龍！」

サニーに詰め寄られる

「何だよサニー」

「ヘルフォートレスってお前のフルコースの一品だよな！！！！？」

「ああ」

「そのとき汁ってどんな効果があるんだ！！！！？」

「美容と滋養強壯の栄養を多く含み全身の疲れ、肌荒れ、枝毛、疲
労回復

肩こり、血行を良くするなどの様々な効果があるぞ特に髪には絶大
な効果がある」

「マジで！！！！？」

「ああこんどとき汁のスープやるよ」

「サンツキユ！！！！！」

サニーはメチャクチャ喜んでいる

「とにかく優奈」

俺は優奈の頭に手を置く

「あ．．．／／／／／／／／／／」

「おめでとうなスープ BBコーンのコーンポタージュ決定だな」

「うん／／／／／／／／／／」

こうして宴会は夜遅くまで続いた

満腹都市グルメタウン

俺は今電車に乗りある場所に向かっている

「・・・」

ちなみに俺は伊達眼鏡を掛け帽子をかぶり変装している

俺はトリコと同等以上に顔が知られているため騒がれないように変装をしている

一見すれば俺だとは分からないだろう

そして電車から降り目的地に到着した

グルメタウン

グルメタウン

通称「満腹都市」

最高十星のレストランが入っているグルメタワーや節乃食堂などがある大都市で

駅の平均利用者数は2500万人以上と言われる

俺は受付でゴールドのグルメIDを通し入る

俺は適当に水晶コーラを買い飲みながらホネナシサンマを食べる

炭火で風味が増し焦げた部分の匂いが食欲をそそる

俺はグルメパートで適当にぶらついている

そしてデパートを出てぶらつく

するとトリコと小松君、そして

「あれ？節乃さん？」

「おや龍じゃないか」

「トリコ達も」

「おお龍！これから俺達節ばあの店に行くんだ！お前も行くつぜ！」
「・・・嫌遠慮しておくよ俺は用があるから」

俺はトリコと別れ酒場で酒を飲む

ここはヘビーロッジ

今も直変装はしている

そしてトリコ達、カーネルが来た

俺はトリコ達とは別に行動を始めた

アイスヘルでは美食檜副料理長トミーロッドを先に叩く！

俺の誇りにかけてトリコ達を危険な目は合わせない

この世界は俺と言う異物を受け入れている

元々この世界には俺はいない

トミーロッドと俺との実力差は明らか

だが舞台はアイスヘル

俺の体は極度に寒い地域では鈍る

それで負ける可能性も高い

なら道連れにするまでだ

出陣！アイスヘル！つてえ！？節乃さんの呼び出し！？

さあて港にはでかい船それでアイスヘルまで行くはずだった・・・
ブルルル
ん？電話？

「はい？」

『龍ちゃん節乃から呼び出しがかかつとるぞ』

「え！？なんで！！？俺これからアイスヘルに！！！」

『そんなのどうでも良いからはよいかんかい！！』

「しょんなゝ・・・とほほ・・・」

『それにお前はグルメ界やアイスヘルみたいな寒い所に行くとなら
ウマが出るじゃろ？』

「それは明らかに師匠のせいですけどね」

電話を切り節乃食堂に向かう

向かうときに船が出てしまった

ああ・・・センチリースープが・・・

しょうがない小松君に頑張ってもらいましょう

ちなみにトラウマは師匠に植え付けられたものだ
・・・いうのも恐ろしい・・・

俺が節乃食堂に行くとドアの前に節乃さんが居た

「なんですか・・・呼び出して・・・」

「うふふふやっぱアイスヘル行こうとしてたの」

「ええおかげさまで船に乗れませんでしたよ・・・」

「そりゃ悪い事したのゝつでもちと頼みがあつてな」

「頼み？食材の調達ですか？」

「あたしと一緒にアイスヘルに行つてほしいんじゃ」

「なんで？」

「おそらく美食會が来ると思うしトリコ達の迎えじゃ」

「はあ・・・俺がアイスヘルに行こうとした目的それなんだがな・・・」

「」

「お前さんだけが行ったらアイスヘルがただじゃ済まんわ！！」

「！！何！？俺メツチャ信用わけ！！？」

「その通りじゃ」

「・・・」

精神に7000のダメージ・・・

こうして俺はトリコ達とは遅れてアイスヘルに行く事になった
つてか俺連れて行く必要あんの？

「信用ないからじゃ！この前無人島割ったばかりじゃろう！！」

ああ・・・そうだった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7324v/>

トリコ チートを持った転生者

2011年10月21日07時01分発行